

京都府埋蔵文化財情報

第 75 号

太田遺跡第10次発掘調査概要	-----	増田 孝彦	--	1
丹波地域の遺構検出面と黒ボク層	-----	中川 和哉	--	5
安徽省の遺跡をたずねて	-----	筒井 崇史	--	9
-平成11年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会 中国研修報告-				
空間情報科学と考古学-その協調と展望-	-----	河野 一隆	--	19
平成11年度発掘調査略報	-----			29
41. 南稲葉遺跡		46. 春日神社遺跡		
42. 杉北遺跡		47. 木津城山遺跡		
43. 市田齊当坊遺跡第2次C2地区		48. 内田山遺跡・内田山B1号墳		
44. 佐山尼垣外遺跡		49. 新田遺跡第5次		
45. 佐山遺跡		50. 新田遺跡第6次		
研究ノート 発掘調査によって検出された四脚門の検討	-----	村田 和弘	--	44
-平安京跡右京一条三坊九町検出の四脚門について-				
府内遺跡紹介 87. 大枝山古墳群	-----			50
長岡京跡調査だより・72	-----			52
センターの動向	-----			54
受贈図書一覧	-----			56

2000年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

おお 太田遺跡第10次発掘調査概要

増田 孝彦

1. はじめに

太田遺跡は、大堰川右岸の行者山麓部に東西1,400m・南北600mにわたって広がる弥生時代前期から中世にかけての大規模な複合遺跡である。遺跡西端には山内川が東流し、その北側には調査地である台地状の微高地が形成されている。調査地周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡や古墳群が存在している。

太田遺跡は、過去9次にわたる発掘調査が実施されており、第1次調査では、弥生時代前期～中期の直径160m以上の環濠集落が検出されている。第2～4次調査は平成7・8年度に亀岡市教育委員会・京都府教育委員会により太田遺跡西側を中心に試掘調査が行われ、集落域が推定されるようになった。第5次調査以降では、弥生時代後期の集落跡が存在することを確認するとともに、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出し、8世紀中頃を中心とする掘立柱建物跡、中世の大型掘立柱建物跡や井戸・道路状遺構が検出された。

今回の調査地は、亀岡市葎田野町字太田小字森23ほかで、微高地上に位置し第8次調査地の北側となる。調査は、府営ほ場整備事業に伴い、京都府亀岡土地改良事務所の依頼を受けて実施した。現地調査は、平成11年5月25日～平成12年2月28日まで実施した。

2. 調査概要

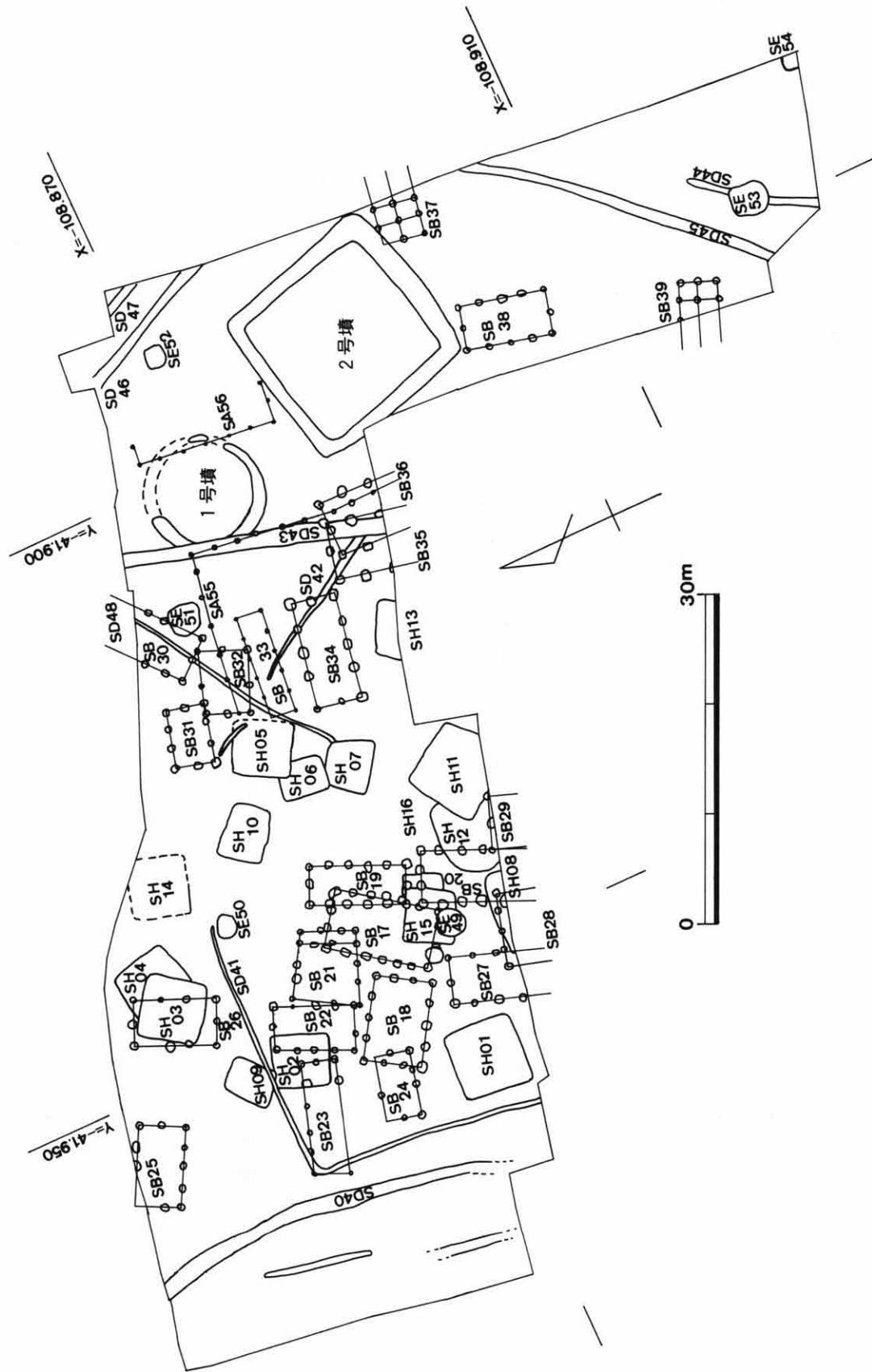
調査地の標高は106m前後を測り、西から東に向かって緩やかに傾斜している。水田として耕作されているため、標高が高い西側ほど削平度合いが高く、包含層は消失している。

今回の調査では、弥生時代後期から中世までの各時代の遺構を検出した。検出された遺構には、古墳2基、竪穴式住居跡16棟、掘立柱建物跡23棟、柵2条、柱穴約1,200基、井戸7基、溝9条などがある(第2図)。調査地東側には古墳が存在することから、古墳より西・南側は平安時代以前の遺構が中心になり、古墳上及び南側は、平安時代以降の遺構が検出された。トレンチ中央部や南側で検出された南北方向に延びる多くの溝は、14世紀以降、現在に至るまでの耕作や区画に伴うものと考えられる。

古墳は、新規検出されたもので関係諸機関協議の結果、太田古墳群と命名されることになった。太田1号墳は、直径9mの円墳が復原される。墳丘には、



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 検出遺構配置図

幅1m・深さ0.3mの周溝がめぐる。墳丘の東側2分1は耕作に伴い、西側の周溝の一部は中世の溝により削平を受ける。周濠内より少量の土師器が出土している。太田2号墳は、1号墳の南側で検出した一辺14mを測る方墳である。墳丘には、幅1.1~2.35m・深さ0.16~0.9mの周溝がめぐる。周溝内には、有機質の堆積が認められた。南溝中央部では、この有機質の堆積層上面に供献されたと考えられる、土師器高杯、甕・壺が出土し、東溝中央部では須恵器蓋・高杯、土師器高杯・甕・甗がまとまって出土している。1・2号墳とも墳丘は削平を受け、埋葬施設は検出できなかった。

遺構の変遷は、弥生時代後期末にはSH01・03・12が出現し、古墳時代前期にはSH11・15・16、SD50、中期前半には太田1・2号墳、後期初頭にSH07、後半にはSH02・04・05・06・08~10・13・14、SB17~24と続く。飛鳥時代後半には、2号墳東側で検出された道状遺構（SD44~47）、奈良時代中頃から平安時代にかけてはSB25~29、SE49・50、平安時代にはSB28・37~39、SD42、SE53・54、鎌倉時代にはSB31~36、SA55・56、SD40・41・43、SE51・52とたどる。

3. まとめ

台地全体の一部を調査したにすぎないが、この地の土地利用の一端を垣間見ることができる。

弥生時代後期・古墳時代前期は、古墳時代後期の竪穴式住居跡と比べるとやや大型の住居が検出された。その後、台地先端付近を利用して2基の古墳が築造される。古墳については、中期に属し、平地に築造されていた点で特筆される。京都府教育委員会が行った第6次調査では埴輪片が採集されたり、調査地南側には塚という伝承が残り、周辺では拳大の河原石の散乱が認められることから、葺石・埴輪をもつ古墳が存在する可能性がある。また、遺構の希薄なSD40西側周辺では、古墳に副葬されていたと考えられる鉄製品(鉄鎌・刀子)の出土が見られ、1・2号墳同様破壊された古墳が存在していた可能性がある。6世紀後半以降、7世紀初頭にかけては、亀岡市鹿谷遺跡、八木町八木嶋遺跡のように掘立柱建物跡の住居や倉庫とともに、竪穴式住居跡が同時に併存していたと考えられる。このように、古墳時代後期には2種の異なった住居様式が存在する。古墳時代の住居跡を見た場合、住居様式の均一性の崩壊が認められ、時間の経過とともに竪穴式住居から掘立柱建物へと移行していく過程が観察される。これらのことは、この集落の居住者の階層の差と見ることもできる。太田遺跡では、整然と並んだ大型建物は検出されなかったが、集落内に小規模な住居区画が存在した可能性を示唆する。この時期の住居跡は掘立柱建物跡・竪穴式住居跡とも2・3回の建て替えによるものであることが明らかとなったが、時期別に区分すると、ほぼ方位を同じくする2~3棟の掘立柱建物跡を1単位とし、東西・南北棟の建物として並び、その周辺に従属的な住居と考えられる竪穴式住居数棟が付随する。建て替えが行われてもその一定の範囲の中で行われたようで、前代の建物跡周辺に限られており、竪穴式住居も同様な状況を成しており、占有していた敷地空間が存在するようである。このことは7世紀代に入ってもそのまま継承されたようで、古墳を迂回するような道状遺構の存在は、同様な敷地空間

の占有があったものと考えられる。

9世紀前半以降、本格的な台地内および周辺の土地利用が開始されたようで、それまで古墳周囲に遺構は存在しなかったが、これ以降、柱穴内から遺物が認められるようになる。古墳周濠内埋土上層中からも、当該時期の遺物が少量ではあるが認められることから、古墳が破壊されたと考えられる。それに伴い新しい土地区画が設けられた(S D42)。この区画が条里に基づくものであったかどうかは不明であるが、現在の畦畔になる以前の区画であることには間違いはない。第5次調査で検出された南北溝とは西に約275mの距離に当たる。この溝を中心に平安時代は集落が形成されたようで、2号墳南側および、前代からの集落部分が居住空間に供され、それより北側は作業空間ないしは、生産域であったようである。その後、S D51が設けられ、前代からの居住域が消滅し、それに伴いS D42が埋められ、新たにS D41が設けられたようである。S D42埋没後は、それに沿うような形で、柵列S A55・56が設けられ、整然とした建物配置が行われるようになる(S B31・30・32)。この柵列間は10mを測り、区画にもとづくことは明らかである。この時点で、台地北端が集落域となり南側、西側は生産域に転じるようである。その後、S D41が室町時代をもって埋没し、太田遺跡の終焉を迎えるようである。

弥生時代以降、前代の小居住空間を踏襲してきたものが、古墳の築造に伴い集落形態に大きな影響を与え、平安時代以降古墳の破壊に伴い、新たな方格地割の設定も集落形態に変容をもたらしたと考えられる。また、鍛冶滓の出土に見られるように、古墳時代後期以降、中世に至るまで、集落内で鉄器の生産も行われていたことも明らかとなった。今後の周辺の調査に期待するところが大きい。

(ますだ・たかひこ＝調査第2課調査第2係主任調査員)

丹波地域の遺構検出面と黒^{くろ}ボク層

中川 和哉

1. はじめに

日本列島では火山灰分布地帯を中心に、黒ボク層と呼ばれる黒色の締まりのない地層が表土層として堆積している。この土の名は黒くてボクボクした感じがすることから命名されている。京都府下においても丹波山塊を中心に厚く堆積していることが多く、主要な遺物包含層の1つとなっている。黒ボク層に対する認識は、特に考古学に携わる人の間で著しく異なっている。その成因については“黒い火山灰が堆積した”等の珍説が登場することも少なくない。年代観についても遺構検出面より上層であることから、弥生時代以降の堆積層と考えている人も少なくない。しかし、土器の集中部が黒ボク層中にあることが散見でき、その下層において遺構が発見されることも少なくない。丹波地域の遺跡内で見られる黒ボク層について考えてみたい。

2. 黒ボク土

黒ボク土は以下のように一般に説明されている。「風化火山灰(いわゆるローム化火山灰)を母材にし、黒色で無機物と混和が進んだ(ムル状)粗しょう(屑粒構造)な腐植質のA層を持つ土壌・・・従来、黒ボク土は火山灰地域に広く発達するため、火山灰を母材に生成した成帯内性土壌の代表格といわれてきた。しかし、一部に二次堆積の火山灰、近隣の河床などからの非火山灰性飛来物、大陸からのレスなどを含む黒ボク土の存在が明らかにされ、火山灰土壌だから黒ボク土という考え方は一考する余地が生じている。」(地学団体研究会編1994)

教科書的には火山灰を母材に形成された土壌とされているが、山野井徹氏(1996)は黒ボク層はローム質土の形成と深く関連しており、ローム層は火山灰起源である必然性が必ずしも必要されないことを明らかにした。黒ボク土は下位ほど古く、土壌堆積生成説で説明できるとした。また、古代人の野焼き等で生じた燃焼炭粒子が活性炭として可溶腐植を吸収・保持し、黒ボク土が形成されるという新説を提示した。

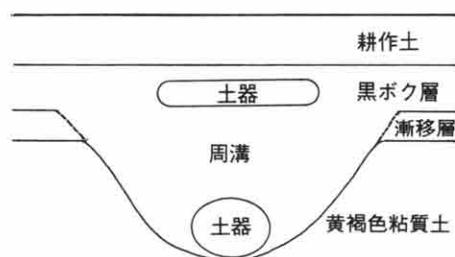
この説に対しては反論(佐瀬・細野・三浦・井上1997、佐瀬・細野1999)もあり、定説化してはいない。佐瀬・細野氏は黒ボク土層が母材の緩慢な堆積により上方成長するが、下方成長を否定できないと言った黒ボク土層の二面性を主張した。その生成には人為が深く関わっているが、火山活動などの非人為的な要因によっても生成される可能性も同時に述べている。

以上のように黒ボク土の生成については諸説があるが、年代順に下層がより古く、上方成長することは一致していると考えられる。これまで発掘調査で明らかになっている亀岡盆地・丹波山地、中国山地における黒ボクの年代、堆積状況について管見を述べたい。

3. 京都府内の黒ボク層

京都府北桑田郡京北町周山にある東山遺跡(中川2000)は、桂川上流の段丘が開析された丘陵端に位置する遺跡である。1999年の発掘調査において、地層断面の連続サンプリングを行い、火山灰分析を(株)京都フィッション・トラックに委託した。基本層序は、上層から耕作土、黒ボク層、漸移層、黄褐色粘質土層、白色シルト(クサリ礫を含む)となっている。サンプリングは耕作土を除いて、上位から5cmずつ連続してサンプリングを行い、黄褐色土まで12資料を採集した。広域火山灰は純粋な層としては認められなかったが、ガラスのピークによって始良Tn火山灰(AT)、アカホヤ火山灰(Ah)の降灰層準が明らかになった。ATは上から11番目の資料に、Ahは2・3番目の資料にピークが認められた。基本層序ではATが黄褐色粘質土層中に、Ahは黒ボク層上位から中位にかけて(上部が耕作のため削平しているため正確には判らない)検出された。黒ボク層の起源が縄文時代早期以前に遡ることは、広域火山灰から明らかになった。この結果は、中国山地での旧石器時代遺跡の基本層序を熟知するものにとっては通常のことと考えられるが、弥生時代以降の研究者を驚かすことも少なくないであろう。遺跡中で筆者が肉眼で観察し得た黒ボク土層の状態は、谷部では非常に厚く丘陵頂部では薄くなる。また、谷部では3つの層に分層でき、上部が比較的硬く砂粒に富む黒ボク層、次に締まりのない黒ボク層、最下層は腐植質を多く含む軟質な黒ボク層であった。黒ボクの層厚は厚いところで、約1mを測る。遺跡内で検出した遺構は古墳時代の竪穴式住居跡で、黄褐色粘質土層上面で検出したが、残りの良いところで10cm程度の残存状態で、黄褐色粘質土層が傾斜している部分では、深くなる住居床面および立ち上がりが検出できなかった。このことは黄褐色土壌面を追いかけていただけで、黒ボク層中に本来その床面があったものと考えられるが、土色の変化や硬度の変化は認められなかった。埋土は黒ボク層であった。

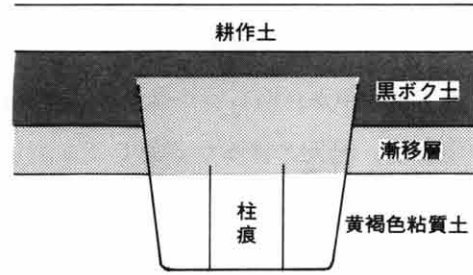
亀岡盆地北端に位置する船井郡八木町池上の池上遺跡(中川・野々口・筒井2000)は、盆地底部の埋没段丘面に位置する弥生時代から中世の複合遺跡である。基本層序は耕作土、床土、黒ボク土層、漸移層、黄褐色粘質土、礫層である。黄褐色土層上面には起伏が若干あり、上層とは不整合で接しているものと考えられる。この遺跡の調査においても他の丹波地域の遺跡同様に、黄褐色土層面においてしか明確に遺構が検出できなかった。しかし、黒ボク層中から多くの土器溜まりが検出できた。特に、弥生時代の方形周溝墓の溝を覆っていた黒ボク土層中には、顕著に弥生



第1図 方形周溝墓模式断面図

土器が集中する場所が認められた(第1図)。このことは、黒ボク層中に遺構が残存していることを示しているものと考えられる。また、律令期と考えられる掘立柱建物の柱掘形には、第2図のように断面で黒ボク層中に立ち上がりが観察できるものもあった。遺構の埋土は、黒ボク土であるものが小型の柱穴などで多かった反面、大型の住居跡、深い溝などでは複雑な様相を示していた。こういった遺構では黒ボク層と黄褐色粘

質土がブロック上に入っている例が認められる。特に柱掘形や埋葬主体部の埋土などの強制的に掘削時とほぼ同時期に埋め戻された土層に顕著である。これらのことから、この遺跡では弥生時代中期には黒ボク層の堆積が認められたことは明らかである。また、特徴として古い遺構ほど埋土が黒い傾向が見て取れた。図2で見られるように黒ボク層に囲まれた部分では黒ボク層の色調や性質により近くなる。



第2図 柱掘形模式断面図

中国山地には火山灰起源の風成層を持つ遺跡が岡山県や兵庫県で知られている。岡山県では上斎原村恩原2遺跡(稲田編1996)で代表的な層序が示されている。出土遺物から見ると、黒ボク層(40cm)中からは縄文土器が、漸移層中からは後期旧石器時代末の細石刃石器群の遺物が出土している。旧石器時代の遺物は漸移層の下に続くローム層から検出されている。ここでも黒ボク層は縄文時代には形成されていることが判る。

また、亀岡盆地に隣接する氷上盆地中の七日市遺跡(久保・藤田編1990)では、耕作土、黒ボク土(下位の層と漸移的に変化)、A T (20cm)、灰白色シルトといった層序が認められた。部分的にA Tと黒ボク層の間に灰白色シルトが認められる部分もある。これらの特徴は東山遺跡、池上遺跡の層位と齟齬しない。

丹波山地に降灰したと考えられる火山灰は、偏西風の関連で西側からもたらされる。特に鹿児島方面のA T・A h、大山火山灰等の中国山地起源のものが見られる。火山灰は噴出源に近づくほど層厚が厚くなるが、黒ボク層は厚くなる傾向を必ずしも示さない。また、黒ボク層を形成するほど多量の火山灰が大山周辺からもたらされたとは考えられない。特に完新世にはいるとその噴出は認められていない。A hの堆積が、主要な母材となったとも、その量から考えにくい。七日市遺跡では、黒ボク土層下層の灰白色シルトは水成堆積物である。

4. 小結

(1) 遺跡調査で判ったこと

- ①黒ボク層が縄文時代の早い時期に形成されていること。
- ②黒ボク層中に穿たれた遺構の埋土は黒ボク化すること。
- ③埋土は古いものほど黒ボク化が進む可能性があること。
- ④河床面と比高差があまりない埋没段丘においても黒ボク層が認められることから、人為的に形成されたとは考えられない場所もある。
- ⑤黒ボク層下位の黄褐色粘質土層は、後期旧石器時代の包含層である。

(2) 調査において留意する点

現実の発掘調査では、黒ボク層中から遺構を検出することは極めて困難であることから、漸移層あるいは黄褐色土層上面で検出せざるをえないが、黒ボク層中の土器の出土地点をおさえて取

り上げを行い、下層で検出した遺構と重ね合わせ対比する必要がある。このことを怠ると遺構中の遺物の多くが包含層出土遺物として一括して扱われる。

黒ボク層中から旧石器が発見された場合には下位に包含層が存在している可能性が高い。多くの場合が、混入と言った言葉でごまかし黄褐色土を調査しないことが多いが、黄褐色粘土層を「地山」として認識することは明らかに間違っている。最後に拙問に答えていただいた京都フィッショントラックの壇原徹氏に末筆ながらお礼申し上げます。

(なかがわ・かずや=調査第2課調査第2係調査員)

参考文献

- 稲田孝司編1996 『恩原2遺跡』岡山県文学部考古学研究室
- 久保弘幸・藤田淳編1990 『七日市遺跡(I)』兵庫県教育委員会
- 久馬一剛・永塚鎮男編1987 『土壌学と考古学』博友社
- 地学団体研究会1994 『地表環境の地学—地形と土壌—』東海大学出版会
- 佐瀬 隆・細野 衛1999 「黒ボク土層生成論—その“堆積性”と“人為の関わり”について」『紀要』XⅧ 岩手県文化振興事業団 pp.19-28
- 佐瀬 隆・細野 衛・三浦英樹・井上克弘1997 「山野井論文「黒土の成因に関する地質学的検討」の問題点」『地質学雑誌』第103巻第7号 pp.692-695
- 鳥居厚志・金子真司・荒木 誠1998 「近畿地方の3地点の黒色土の生成、とくに母材と過去の植生について」『第四紀研究』37(1) pp.13-24
- 中川和哉2000 「東山遺跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉・野々口陽子・筒井崇史2000 「池上遺跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山野井 徹1996 「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』第102巻第6号 pp.526-544
- 山野井 徹1997 「山野井論文「黒土の成因に関する地質学的検討」についてのペトロジストの疑問に答えて」『地質学雑誌』第103巻第7号 pp.696-699

安徽省の遺跡を訪ねて

—平成11年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会 中国研修報告—

筒井 崇史

1. はじめに

全国埋蔵文化財法人連絡協議会・近畿ブロックでは、これまでに7回にわたって、中華人民共和国への海外研修を実施してきた。本年度からは全国の法人が対象になり、本年は北は北海道から南は鳥取県までの15団体計27名の参加を得て実施された。今回は、全国埋蔵文化財法人連絡協議会の会長である坪井清足・(財)大阪府文化財調査研究センター理事長が団長として参加された。近年は広範囲の移動はせず、おおむね1省程度に所在する遺跡を見学することが多い。平成11年度は、日本ではあまりなじみのない長江下流域の安徽省を訪れた(第1図)。

安徽省は、南北約600km・東西約300km、面積13.9万 m^2 を測る。人口は6,000万人弱を数える。地域的には長江と淮河という2つの大河によって、淮北平原・江淮丘陵・皖南山地の3地域に分けられる。今回、訪れたのはおもに長江以北の淮北平原・江淮丘陵の2地域である(第2図)。

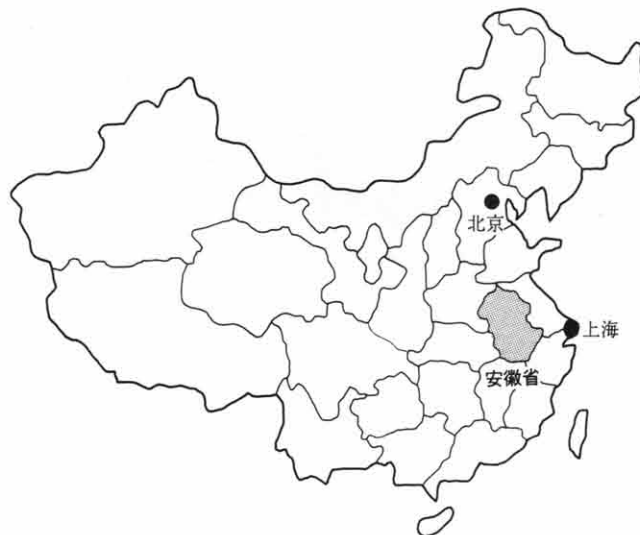
今回の研修は、平成11年11月19日～平成11年11月26日までの8日間で、安徽省の各遺跡のほか、河南省(前漢の梁孝王墓ほか)、上海市(上海博物館)を訪れた。当調査研究センターからは調査第2課第2係調査員筒井崇史が参加した。

以下、訪問先・研修内容などについて、日を追って報告することにしたい。なお、ここに掲載した写真は、第17図を除き筒井が撮影したものである。第17図は、中国研修事務局で撮影されたものを使用した。

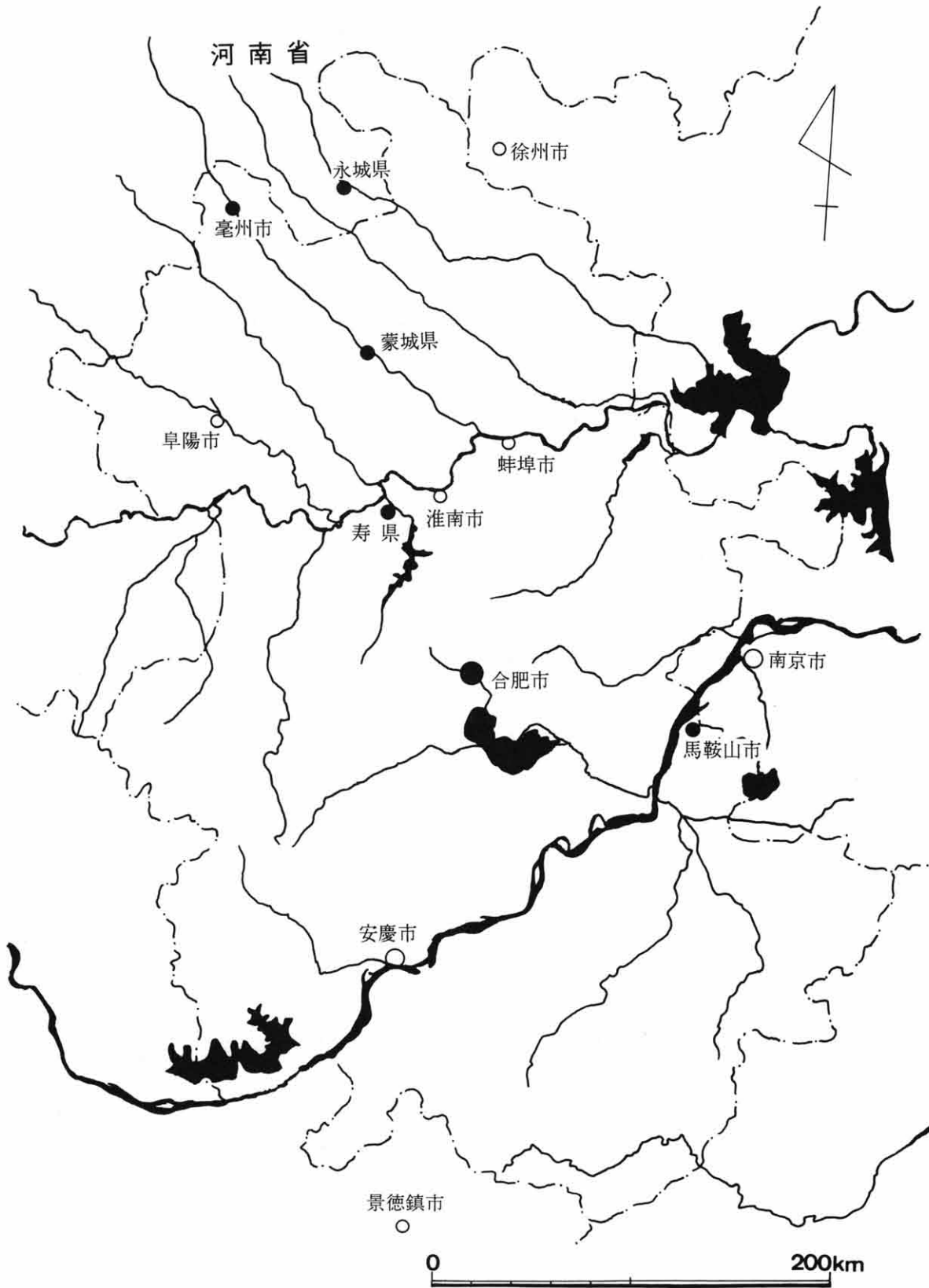
2. 研修の概要

11月19日(第1日) 関西国際空港から13時40分に中国東方航空機によって上海国際空港へ向かう予定であったが、航空機のトラブルにより、関西国際空港の出発は18時30分(日本時間)、上海国際空港への到着は20時20分(北京時間、以下時刻は全て北京時間)であった。上海国際空港で、羽田出発組と合流の上、第1日目の宿泊地である安徽省馬鞍山市まで、約4時間かけてバスで移動した。

11月20日(第2日) 馬鞍山市に所在す



第1図 安徽省位置図



第2図 安徽省全図
(黒丸は今回訪れた都市・地域)



第3図 馬鞍山市 朱然墓博物館



第4図 長江を渡る

る朱然墓博物館を見学した。同博物館は、三国時代の呉の將軍である朱然(249年没)の墓が発見されたのを機に、墓に覆い屋を架け、また出土遺物の展示室を設けるなどして、博物館としたものである。朱然墓は、いわゆる磚室墓で、墓道・前室・後室からなる(第3図)。また、木棺が非常に良好に残存していた。なお、隣接地では朱然の一族の墓と思われる磚室墓も発見されている。

その後、長江をフェリーで渡河して(第4図)、安徽省の省都である^{こっぴ}合肥市に向かった。合肥市内で、遅めの昼食の後、安徽省中部の寿县に向かった。ただ、寿县に向かう途中で、交通事故のため道路が閉鎖されたため、寿县到着は21時過ぎであった。

なお、交通事故で道路が渋滞してバスが動かない時間を利用して、今回の研修に同行して下さった安徽省文物考古研究所の張敬国氏より、安徽省の旧石器・新石器時代の遺跡について、概説をしていただいた。

11月21日(第3日) 寿县は、古く春秋時代にまでさかのぼる遺構・遺物が見つまっている。

まず、寿县を囲む城門と城壁を見学した(第5図)。現在ある城門や城壁は宋代に造られ、明代に修復・拡張されたものとされる。現在は、当時の城壁を保存するために復原作業が進んでいる。城壁は寿县市街地を取り囲み、東西南北の4方に門を持つ。第5図の賓陽門は寿县城の東門に当たる。

次に寿县博物館を訪れた。同博物館は、県レベルでは最大級の博物館で、宋代の報恩寺という寺を博物館として転用したものである。寿县は、春秋時代の^{さい}蔡国、戦国時代の^そ楚国、漢代の^{わいなん}淮南国などの都が置かれた所であり、とくに春秋・戦国時代の諸侯墓が見つかっており、青銅器などの遺物が出土している。寿县で発見された遺構で最も著名なもの1つとして、春秋時代の蔡侯墓とされる墓がある。同墓から大量の青銅器などが出土したが、とくに青銅器は南方系の要素が強いとされる。ただ、これらの青銅器類は合肥市に所在する安徽省博物館に収蔵されている(23日に見学)。このほかに寿县郊外では戦国時代の楚の王墓なども見つまっている。

寿县博物館の後、漢の高祖劉邦の孫である淮南王劉安墓(未調査)を見学し、安徽省北部の蒙城県へ向かった。

蒙城県内で昼食を摂った後、蒙城博物館を見学した(第6図)。ここでの注目すべき遺跡として、尉遲寺遺跡の資料がある。同遺跡は1994年中国考古10大発見の1つとされる遺跡で、52基の住居址・156基の墓・環濠などが見つかっており、約5000年前の遺跡である。中国でも集落と墓域が



第5図 寿县 賓陽門



第6図 蒙城県 蒙城博物館



第7図 亳州市 地下運兵道

一緒に見つかった新石器時代の遺跡はそれほど多くないという。

蒙城博物館の後、莊子の祀られている莊子祠(建設中)に立ち寄った後、亳州市へ向かった。

亳州市は、安徽省の最北部に位置し、三国志で有名な曹操の生誕地として知られる。ここには曹操やその一族に関連した遺構・遺物が多く見つかっている。

21日は、曹操が造ったとされる地下運兵道(第7図)と、曹操一族の墓とされる董園2号墓・張園1号墓の見学を行った。運兵道は亳州市街地の地下に兵士を移動させるために造られたトンネル状の地下道である。その全容は現在も不明であるが、記録などから亳州市街のかなりの範囲に及ぶと考えられる。董園2号墓は曹操の父曹騰の墓かと考えられている。また、張園1号墓は、現在、覆い屋施設などが老朽化しており、閉鎖中であったが、特別に見学させていただいた。覆い屋施設などの修理費がないため閉鎖せざるをえないとのことであったが、中国でも文化財関係の予算は非常に少ないようである。しかし、重要な遺跡であるから早急に修理、公開してほしいものと感じた。

11月22日(第4日) 午前中は、前日に引き続き亳州市内の遺跡などを見学した。

まず、亳州博物館を訪れた。同博物館は大関帝廟内に所在する。大関帝廟は清代初期に商人たちが会館を建てたのが始まりとされる。それが後に関帝=関羽が商人の神様であるということから、関帝廟になったとされる。関帝廟の正面には非常に見事なレリーフが磚に施されている。この関帝廟内部には花戲楼と呼ばれる舞台があり、また現在、亳州博物館が置かれている(第17図)。

亳州博物館には、後漢時代の銀縷玉衣ぎんるぎょくい(曹操の祖父曹嵩のものではないかといわれる)や通称「倭人磚」と呼ばれる磚などが展示されていた。「倭人磚」には「有倭人以時盟不」という線刻が刻まれたものであるが、「倭人」を「倭人」と読む説もあり、中国国内でも議論の1つとなっている。

亳州博物館を後にして、曹操一族の墳墓を公園整備した、曹氏公園を訪れた(第8図)。曹操の一族の墓とされる墓4基を公園内に含む。現在、整備途中であるが、日本の遺跡公園のように整備されており、今後、資料館なども建てていく予定という。

やや早めの昼食を終えた後、いったん安徽省を出て河南省永山県芒山えいざん ぼうざんにある前漢代の王墓への見学に向かった。途中、さまざまなアクシデントなどがあり、当初3時間程度で到着の予定が大幅に遅れ、実際に見学できたのは夜間であった。見学した漢墓は、漢の高祖劉邦の孫に当たる梁王劉武(第10図、諡号は孝王)とその後の陵墓、および柿園墓しえんと呼ばれる3基である。永山県芒山では、これら3基をはじめ計21基の漢墓が確認されているが、現在、見学可能なのは先述の3基のみである。

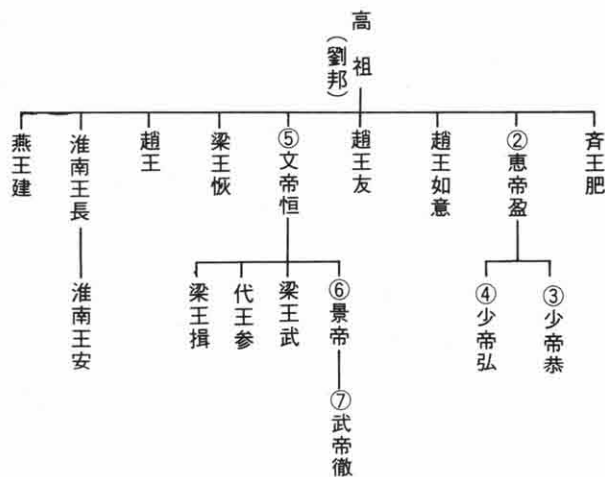
柿園墓は梁孝王の子供の墓と言われて



第8図 亳州市 曹氏公園



第9図 河南省 永山県梁孝王后墓



第10図 漢王室系図



第11図 合肥市 安徽省博物館

いる。墓室内には壁画が描かれている。陶俑や225万枚を数える半両銭などが出土したという。閉塞に使われていた石は隣接する山東省からもってきたという。

梁孝王后墓は、最大級の漢墓で、総全長は200mを越えるという。墓室に至るまでに車馬坑・耳室をもった緩い斜道を降っていく。墓室の周囲には回廊が別に掘られて設けられている。墓室も第9図のように非常に巨大なものである。また、

入り口が2方向にのびるが、別に梁孝王墓とつなぐ通路を設けようとしていた(これは未完成のまま放置されている)。

梁の孝王は、高祖の孫にあたる劉武といい、墓自体は梁孝王后墓よりもやや小さめである。墓室に至る斜道があり、その両脇には100㎡にも達する部屋が複数配されている。

非常に遅い夕食後、亳州市まで戻ったが、ホテルへの帰着は23日の早朝であった。

11月23日(第5日) 午前中に亳州市から合肥市へ、列車で移動した。列車は7時35分に亳州駅を出発、12時5分に合肥市到着の予定であったが、1時間遅れて13時過ぎであった。

合肥市は安徽省の省都であり、安徽省博物館や安徽省文物考古研究所など文化財関係の施設もここに所在する。合肥市は本来寿县よりも小さい町で、かつては城壁もあったそうであるが、省都としての発展の過程で城壁は全て取り払われてしまったという。

遅めの昼食後、安徽省博物館を訪れた(第11図)。同博物館は、合肥市に中心地に所在し、大規模・総合型の博物館として、1956年に設立された。安徽省博物館には23万点以上の収蔵品があり、常設展示の1つとして『安徽古代文明陳列』という考古学・歴史関連の展示がある。

その中では、やはり青銅器関連の展示が一番印象深かった。青銅器関連では、商(殷)、西周、春秋・戦国時代の、1000年以上にわたって続く青銅器文化の中で、はぐくまれた安徽省内出土の青銅器が所狭しと展示されていた。この中には、21日に訪れた寿县の蔡侯墓で出土した多数の青銅器群も含まれる。蔡侯墓出土の青銅器には被葬者の名前を鑄込んだ銘文が見つまっているが、文献上に現れる人物と同一ではないので、多くの議論がされている。現在、その人物は蔡の昭侯(在位前518～前491年)と考えられている。

また、安徽省は戦国時代には楚国の領域に取り込まれたため、中原地方とはやや異なる青銅器群が製作された。先述の寿县では、前241～前223年にその都が置かれたこともあり、楚王やその重臣の墓と思われるものが寿县に近い朱家集などで見つかっており、ここからも多くの青銅器が見つまっている。なかでも、朱家集の楚王墓出土の大鼎は銘文があり、また非常に大きい。銘文や精緻な文様をもつ青銅器群を作ることのできた当時の技術には驚かざるを得ない。

青銅器以外では、同じく21日に訪れた亳州市で見学した董園2号墓などに代表される画像石墓

のレプリカなどが展示されていた。画像石墓は後漢代に流行する墓制の1つで、基本的には磚を積み上げて墓室を造り、磚にさまざまなモチーフの画像が刻まれたものである。また、亳州市の曹氏家族墓から出土した文字磚なども展示されていた。

なお、この日の夕食では、安徽省文物局李紅副局長、安徽省文物考古研究所楊立新所長、同張敬国主任の3氏をお招きして、いろいろお話をうかがう機会を持つことができた。

11月24日(第6日) 本日は、今回の研修でもメインとなる凌家灘遺跡を見学した。凌家灘遺跡は、合肥市の東約50kmに位置する含山県凌家灘村に所在する。

凌家灘遺跡は、1985年に地元の農民が土器や玉器を発見したことから知られるようになった新石器時代の遺跡である。1987年に1次・2次調査が行われ、昨年1998年には第3次調査が行われた。また周辺のボーリング調査なども行い、遺跡の範囲が東西1500m以上・南北500m以上、面積100万 m^2 に達するとされる(第14図)。

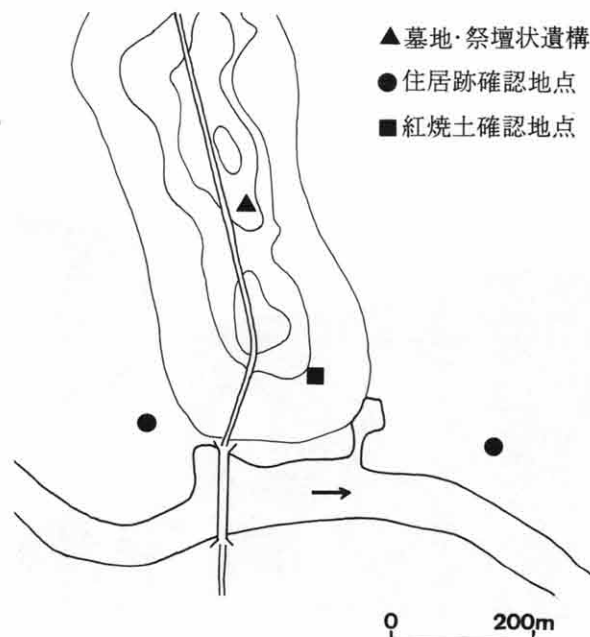
3次にわたる発掘調査では、祭壇状遺構とその周囲に分布する44基の墓が調査された。この祭壇状遺構は、遺跡で最も高所に位置し、かつ北端近くにある(第12図)。ここから南方および東方に向かってゆるやかな傾斜が続き、集落が分布すると考えられている。遺跡の中央付近には、紅焼土と呼ばれる赤土が厚く堆積する。これは、地盤を焼き固めて、いわゆる掘立柱建物跡を立てるために行った



第12図 含山県 凌家灘遺跡墓域・祭壇状遺構検出地点遠景



第13図 含山県 凌家灘遺跡見学風景



第14図 含山県 凌家灘遺跡地形図

(注1 文献⑥より再トレース)

行為とされ、張敬国氏らは宮殿域と考えておられる。遺跡の南限には長江に注ぐ裕溪河がある。この河は近年に付け替えられているため、川底にも遺構・遺物が分布する。先述の宮殿域の南側からこの河までが集落域と考えられている。また、炭素14年代測定が行われており、5300年ないし5960年前という年代が得られている。

なお、凌家灘遺跡については、安徽省文物考古研究所の張敬国氏に、現地を案内してもらいながら説明していただいた(第13図)。

凌家灘遺跡では、墓から多量の遺物(約1200点)が出土したが、その半数は玉器であるという。出土玉器としては、玉環・玉璧・玉璜・玉玦・玉鉞など、新石器時代の遺跡では比較的良好に見える玉器から、玉人・玉鷹・玉龍など非常に珍しい玉器までさまざまな玉器が存在する。数の多さや精巧である点で新石器時代における重大な発見とされる。

玉器のほかに、玉に穴をあける道具と考えられている砂岩製工具が出土しており、注目される。ただ、穿孔道具としてはやや大型品で、先端部も摩耗しているため、詳細が明らかでないのが残念であった。したがって、管玉のようなものに穴を開ける工具というのではなく、もう少し異なるものに穴を開ける工具であった可能性もある^(注2)。こうした工具が中国国内で出土した例はなく、今後の研究課題である。

これらの遺物については、その一部を安徽省文物考古研究所で実際に見せていただいた。

凌家灘遺跡を見学した後、漢代の放王崗漢墓を見学した。同漢墓は、隣接する工場の拡幅工事中に発見されたもので、湿地状の土壤にあったため、墓室内の木槨や木棺が非常に良好な状態で遺存していた。墓からは木器・玉器・青銅器・鉄器・陶器など約900点が出土した。また印章が出土しており、被葬者が「呂柯」という人物であることがわかった。ただし、この人物は記録に全く残っておらず、前漢代の官人であると推測されるに過ぎない。

なお、ここの展示施設では、放王崗漢墓出土遺物のほか、北山頭漢墓などの遺物も展示されていた。

昼食後、合肥市に戻り、安徽省文物考古研究所を表敬訪問した。安徽省文物考古研究所では、



第15図 合肥市 安徽省文物考古研究所長 楊立新氏の挨拶
(写真左側が楊所長)

所長の楊立新氏から歓迎の挨拶をいただくとともに、坪井清足団長による挨拶があった(第15図)。同研究所では、凌家灘遺跡出土の遺物をはじめ、楚王墓や漢墓から出土した副葬品の玉器や漆製品などを見学させていただいた。また、これらの遺物については張敬国氏からていねいな説明を受けた。

11月25日(第7日) 合肥空港7時40分発の航空機で上海市に向かう。午前中は上海市内を観光し、昼食後、上海博物館

に向かった。

上海博物館は、近年建て替えられて非常にきれいな建物となっている(第16図)。上海博物館の展示は、時代別などではなく、遺物の種類、つまり青銅器・玉器・陶器などによって行われており、その展示量は膨大で、全てを見学するのは限られた時間では無理であった。結局、私は青銅器と玉器の展示に限って見学した。

青銅器は、夏代とされる鉞をはじめ商・西周・春秋・戦国の各時代のものが展示されていた。これらの青銅器群は、工芸的に非常に優れた作品であることは一目瞭然であり、その製作工程などの復原模型なども展示されていたが、これらを大量に作り、所有できたことは、当時の権力者の姿を垣間見ることができた。また、この時期のものには銘文をもつものがあり、当時の社会を復原する上で重要な情報となっている点も注意された。

玉器は、有名な良渚文化に先行する馬家浜・崧沢両文化に位置づけられるものから、青銅器と同様に、戦国・秦漢代のものまでが多く展示されていた。良渚文化期前後の玉器には、魚・鳥・蟬・鹿・^{とかげ}蜥蜴など、動物をモチーフにしたものが多い。また、興味を引いたものとして、神人(前24～20世紀頃)や舞女(戦国時代)など、人をモチーフとした玉器もあった点である。

11月26日(第8日) ホテルを出発後、新上海国際空港に向かい12時35分発の全日空機によって日本へ向かった。新上海国際空港は、最近開港したばかりの空港で、建物自体は日本の関西国際空港と同じ設計業者が手がけたそうで、カウンターや通路、乗降口、待合室などが関西国際空港とよく似ていた。

初日のようなトラブルもなく、日本には15時25分に到着し、手続き等を終えた16時すぎには解散し、各自帰宅の途についた。

3. 研修を終えて

今回の中国研修では、日本国内ではあまり知られていない遺跡を多く見学することができ、その点で非常に有意義な研修であった。また、参加財団数も昨年までの近畿圏から全国に変わったことから、より多くの地域の方々と交流することができた。

今回の研修では、日本国内のさまざまな諸文化の源流が中国にあることを再認識するとともに、日本国内において発掘調査に従事する我々自身ももっとこの地域の調査に目を向けるべきであることを痛感した。

謝辞：安徽省文物考古研究所の張敬国氏には、研修の全行程に同行していただき、各地での見



第16図 上海市 上海博物館

学に当たって尽力していただいた。深く感謝したいと思う。

(つつい・たかふみ＝調査第2課調査第2係調査員)

注1 凌家灘遺跡については、すでにいくつかの学術誌に略報などが報告されている。以下に掲げる学術誌はいずれも中国語で記述されているが、日本国内でも手に入るものである。なお、今回の中国研修に関わる諸遺跡の参考文献は、凌家灘遺跡を除いてすべて割愛した。

文献① 安徽省文物考古研究所「安徽含山凌家灘新石器時代墓地発掘簡報」(『文物』1989年第4期 文物出版) 1989

文献② 安徽省文物考古研究所・中国科学技術大学開放研究実験室「凌家灘墓葬玉器測試研究」(『文物』1989年第4期 文物出版) 1989

文献③ 陳久金・張敬国「含山出土玉器片図形試考」(『文物』1989年第4期 文物出版) 1989

文献④ 張敬国「凌家灘遺跡第三次考古発掘主要収獲」(『東南文化』1999年第5期 南京博物院) 1999

文献⑤ 田名利「凌家灘墓地玉器淵源探尋」(『東南文化』1999年第5期 南京博物院) 1999

文献⑥ 張敬国「安徽含山県凌家灘遺跡第三次発掘簡報」(『考古』1999年第11期 中国社会科学院考古研究所) 1999

注2 この穿孔道具については、上記文献⑥に写真が公開されている。



第17図 研修参加者による記念撮影(亳州市 大関帝廟にて)

空間情報科学と考古学

— その協調と展望 —

河野 一隆

1. 歴史空間の認識論的検討

(1) 空間認識の恣意性について

1999年9月24日、米国カリフォルニア州のバンデンバーグ空軍基地より打ち上げられた、高解像度商用衛星「IKONOS-1(イコノス)」は、すでに衛星写真の配信を開始している。これにより、「Landsat-5(ランドサット)」やフランスの衛星「Spot-3(スポット)」に加えて、航空機による空中写真並の解像度に迫る衛星写真の入手が可能になった。現在、探査衛星として知られるものには、この3機のほかに、「TRMM」・「ERS-1」などが知られている。宇宙から見た地球、大地はどのように見えるのだろうか？視点を変えることで、人間活動やその累積である歴史も見え方が変わってくる。考古学分野でも、GIS(地理情報システム)の普及によって、リモート・センシング技術の活用が活発となった。C. クラムリーによるフランス・ブルゴーニュ地域の地域研究^(注1)をはじめとして、探査技術の進歩と関連した先駆的な研究が、インターネット上で披瀝されることも普通のこととなった。思えば、クロフォードが空中写真の有効性を力説し、末永雅雄が前方後円墳の航空写真をまとめてから半世紀、今や考古学は地球の外側に設置された感覚器官による情報が、研究分野に活用され始めようとしている。

そもそも、私たち人間が生活する物理的な空間を客観的に認識することは可能だろうか。そして、仮にそれが可能であったとしても、客観的な言説によってそれを表現することは可能だろうか？この問題は、実は見かけほど容易ではない。手元に広げた一枚の地図、これが客観的な現実の空間の表現ではないことは誰しもが気付いていることである。^(注2)たとえば、小学生の描いた地図をみてみよう。小学生の地図は、しばしば学校・通学路・公園・友達の家が、実際の距離・位置関係を無視ないしは誇張して



第1図 ランドサット衛星から見た近畿地方
(CD-ROM「ランド撮図 近畿編」より一部改変)

描かれている。私たちも時に「略図」と断って、誇張した地図を書く。これらが成立するためには、私たちが空間として認識した3次元空間を、さまざまに2次元へと置換することができると考えているからである。しかし、空間認識は、年齢や目的によって大きく左右されてくるから、2次元へ抽象化する過程で客観性がいろいろと捨象されることも、ある意味では当然である。さらに、特に考古学が扱う地図の場合は、時間という新たな次元の属性が加わる。多様な考古学的検討を加えた結果、生み出された多様な主題図は独自の意味を創出する。そこに意味の過剰が発生する。かくして、空間情報が増えれば増えるほど、自らの空間を客観的に認識できないというパラドックスが生じることになる。歴史研究が歴史家の現在の位置の認識と表裏一体であると言われる所以は、空間認識にひそむこの陥穽が原因であり、つまり私たち人間が空間認識をする場合には、そこから一端切り離された上で、空間を、歴史家を含む私たちのの主体的な言説によって再構成(脱構築)しなければならないのである。その意味で空間全体をありのままに認識し、それを表現するといったことは、絵空事にすぎない。

と理屈をこねてみても、空間認識なんて所詮無理とあきらめては、科学的思惟のための対象化はできないのであって、古来、私たちは、何とかしてそこに認識のための論理を持ち込もうとした。ほぼ1世紀前、歴史は科学か否かといった論争があった^(注3)。日本でも戦後すぐに、歴史学の一つのテーマであった「世界史の基本法則」は、歴史の法則的理解が可能かといった真摯な問いかけでもあった^(注4)。今世紀末の世界史の激動の中で、史的唯物論は次第に力を失ってきたが、空間認識の重要性は、高度情報化社会を迎えて一層高まっているように思う。そこで肝要となる点は、空間認識をするための方法論の再吟味であると考ええる。特にめざましい発達をみせる情報技術＝IT(Information Technology)を活用した空間情報科学もその一つである。考古学の分野でも「情報考古学」・「数理考古学」と呼ばれるコンピュータを使った研究領域がある。しかし、コンピュータを使うか否かは副次的な問題であり、空間認識における恣意性を主体的に意識した上で、それを表象する言説があれば、それに越したことはないのである。また、現在のOS(Operating System)に依存したコンピュータの将来的な方向性も、その目覚ましい発達と比例して確定的ではないように思われる。空間情報科学を目指した上で、手段としてコンピュータを使わなければ、かつてプロセス考古学が過ちを犯したように、過去の人間の行為をコンピュータの奴隷としかねないのではなからうか。

(2)空間情報科学の登場

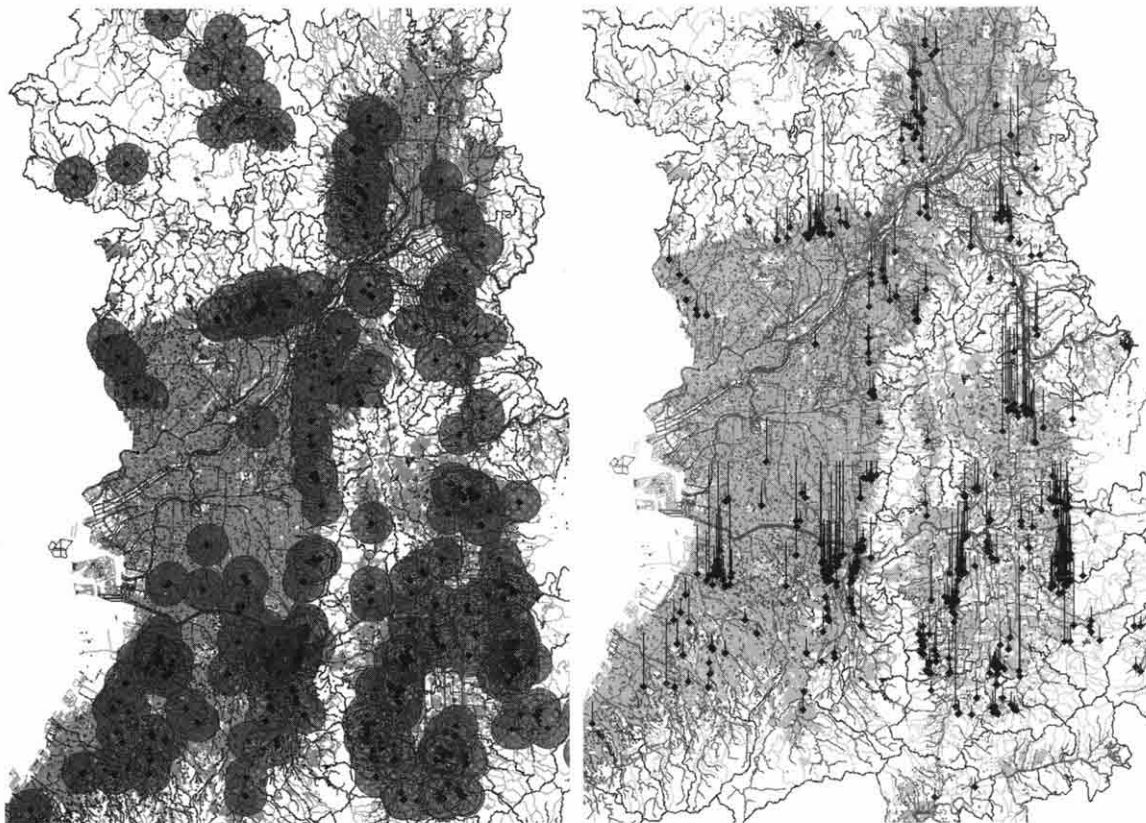
空間情報科学とは若い学問である。1997年に設立された東京大学空間情報科学研究センターによれば、空間情報科学とは、空間的な位置や領域を明示した自然・社会・経済・文化的な属性データ(＝「空間データ」)を、系統的に構築→管理→分析→総合→伝達する汎用的な方法と、その汎用的な方法を諸学問に応用する方法を研究する学問である^(注5)という。例えば、「大都市人口集中」、「マヤ文明圏の変遷」、「地球温暖化問題」などの空間現象や空間的社会問題を、人文社会科学や自然科学、工学などを空間情報科学が統括することで、解決・解明する方法であるという。この空間情報科学が今後、着実に根付いていくか、一過性の流行に終わるかは、空間情報科学独自の

方法論の深化と同時に学際的な研究の協力にかかっていることは言うまでもない。その中で歴史研究が寄与できる領域は、歴史空間の認識論的枠組みについて、検討を詰めていく中で、必ずや見出すことができると考える。逆説的に言えば、その意味で、歴史の研究とは、歴史家個人が主体的に自己を投影する空間創造の学問に他ならないのである。

2. 考古学の情報技術(I T)とその利用

(1) G I Sの普及

平成7年1月17日未明、阪神・淡路地域をおそった大地震は、死者6000人以上の未曾有の被害をもたらした。被害の様子はインターネットを通じて世界に配信され、各地から復興支援の手が差し伸べられたことも記憶に新しいが、震災復興に威力を発揮し、日本において有効性が認められたのが、ほかならぬG I Sであった。^(注6) G I Sそのものは、すでに1960年代に、カナダやオーストラリアで実用への歩みが始まっており、考古学分野でもC A A (Computer Application and Quantative Methods in Archaeology)^(注7)92大会を紹介した森本晋氏のレポートにも見える。^(注7) また、後述するように岡山大学考古学研究室によるIDRISIを使用したG I S分析(古墳群・弥生集落分析)は、日本の先駆的な事例と位置づけられよう。^(注8) しかし、情勢は、この2~3年で大きく転換している。それは、自治省が主導する「全庁型G I S」が、1995年9月に発足した関係省庁連絡会議、千葉県浦安市・岐阜県大垣市・奈良県橿原市の3市による実証実験を経て、各市町村でも本格導入されるようになったことである。^(注9) 中でも大垣市の実験報告は、歴史地理学的検討も加え



第2図 近畿地方前方後円墳分布のG I S分析
(左：古墳を中心に2 kmバッファ処理 右：規模別グラフ表示)

られた報告書としてまとめられ、GISが歴史学・考古学の分野でも研究の道具として有効であることを位置づけた^(注10)。近畿地方でも、最も先駆けて導入した(財)京都市埋蔵文化財研究所のほか、奈良国立文化財研究所・(財)向日市埋蔵文化財センターなどの都城を抱える地域の発掘調査に活用されている以外に、自治体でGIS導入を検討しているところが多いと聞く。明らかにGISは、考古資料(遺跡)を分析・研究する初歩的段階から、考古学的な情報を管理・普及啓発するための実践的段階へとシフトしてきたのである。

(2)海外におけるGIS

この動向は、日本だけではないようだ。隣国の韓国においても、官民双方が主導してGISが地理情報分析ツールとして開発され、数値地図の発行も進んでいる。特に、ソウル市・光州市・大邱市などの都市部で本格的な利用が進んでいるほか、郡部地域においても空間情報データの整備が進んでいる。また、衛星写真の利用も活発であり、一部をインターネットを通じてダウンロードすることも可能である。また、Javaを用い、インターネットGISについても、ソウル市内データや検索エンジンを通じて照会が可能である。一方、中国では、北京市・成都市・香港市など中国主要都市の地図・目標物・ルート検索が可能なインターネットGISも試みられている^(注11)。このように、GISデータベースの整備については、東アジア世界でも意欲的に取り組まれており、それが考古学の世界に反映されることも時間の問題であると思われる。

なお、GISソフトウェアであるIDRISIは、オンラインのマニュアル^(注12)が公開されており、考古学研究における利用側面も多い。「Internet Archaeology」^(注13)やサザンプトン大学のWebサイト^(注14)では、IDRISIを用いた考古学的分析の事例研究が披瀝され、空間情報科学への積極的な取り組みをうかがうことができる。

(3)考古資料の標準化と問題点

遺跡GISの普及がもたらす先は、考古資料の標準化である。元来、考古資料は標準化の困難な分野と言われてきた。しかし、年間累積する莫大な資料を前に、必要な情報へアクセスすることが、個人の努力では困難な現状となってきた。そこで、文化庁主導による「報告書抄録」が考案され、全国埋蔵文化財法人連絡協議会(全埋協)では報告書抄録の集成が、奈良国立文化財研究所の協力も得て、平成8年度分から開始されている。また、国際的にも考古遺跡共通データ規格化の動きがあるという^(注15)。Web上で公開されているその案を見ると、遺跡名称から遺跡概要まで、「報告書抄録」よりはるかに詳細な項目が列挙されている。これらは、テキスト・ベースのものである。一方、図面・写真類については、図面では空中写真図化図面がCADベースで作成され、写真については劣化の少ないデジタル化(Photo CD)が進められるようになってきた。以上のように、現在、考古資料の記録保存とデジタル化とは、表裏一体のものとして進められており、今後もその潮流は、継続されることが予測される。

ただ、その中で留意すべき点もある。歴史の中に個人の役割を見いだすことこそが、歴史認識であると言った議論は、古くから繰り返されてきた。だが、考古学においてはかなり特殊な例を除き、個人を相手にせず、遺構・遺物の中に個人を見出だしている。このために、遺跡の個性や

特性が、考古資料の標準化の過程で漏れ落ちてしまう場合もあり得る。考古資料の一元的管理だけでなく、遺跡の個性を伝え、第三者と共感できるための何らかの「仕掛け」が必要なのである。前節で私は、歴史空間の認識の恣意性を論じたが、だからといって、空間情報を機械的に標準化すべきだと唱えているわけでもない。要は、考古資料の特性に応じた標準化と個性化の必要性を本節では確認しておきたいのである。

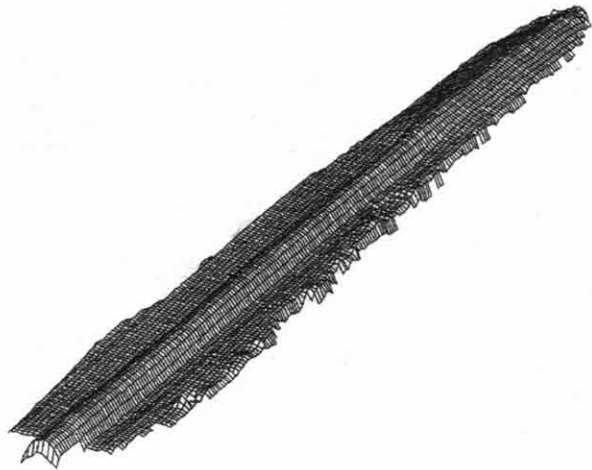
3. 統合型考古学アーカイバの提唱

(1) 考古学アーカイバの構想

その一つの解決策として、私は統合型考古学アーカイバを提唱したい。それは、単に考古資料データを情報発信するだけでなく、考古資料を構成するデータ・セオリー・メタデータ・メタセオリーの全体を格納したデジタル的な情報箱である。それを、インターネットなどのコンピュータ・ネットワーク上に設置し、その利用者の要求に応じて情報入手することを可能にしたクリアリングハウスを意味している。考古資料を構成するデータ・セオリー・メタデータ・メタセオリーの各位相は、研究者によって無意識的に使い分けられてきたが、それを意識的に捉え直すことにより、共同研究のための共通基盤ができる。より具体的に、以下では考古資料を構成する各位相についてさらに深化させて議論したい。

(2) データについて

考古資料を構成するデータとは、広義の空間情報に包括されるが、分析的に以下の3つのサブデータに分離できると考える。それは、(1)形状データ、(2)テキストデータ、(3)関係性データである。形状データとは、遺物の法量・大きさ・容積、遺構の形状・規模などを指す。これらは測定数値のみのデータとその集合体であるCADによる線のデータがある。また、近年では、非接触で3次元測定を行うレンジファインダなども実験・開発が進められている^(注16)。また、遺構測定に当たっては、GPS(Global Positioning System)や物理探査なども形状データ回収のための有効な手段と言えよう。次に、テキストデータとは、デジタル的に再構成される遺構・遺物の輪郭に貼付される表面状態のことである。例えば、土器の器表面の調整、石器の剝離面のフィッシャーとリング、木器の加工痕などが該当するし、遺構では石室や石組井戸に見る石の積み方(目地の通り方)、古墳の葺石などが含まれる。これをデジタル化する手段は、写真画像であり、デジタルカメラが有効と思われる。しかし、カメラは光学的レンズを通して撮影するために、近くのもの長く、遠くのもの短



第3図 レンジファインダによる銅剣の計測
(注16書P54図6-27より)

く写ってしまい、レンズ字体にもゆがみが生じる。そこで、撮影した画像をオルソフォト(正射投影画像)化する作業が不可欠となる。そうして、オルソフォト化されたテクスチャデータをG P Sやレンジファインダなどによって測定された形状データの上に重ね合わせる(drake)させることで、デジタル的に遺構・遺物を再構成することが理論的に可能となる。これは、すでに失われた遺構・遺物でも、基準値を与えてやれば、資料として活用できることを可能とする^(注17)。次の関係性データとは、再構成された個々の遺構・遺物の関係性を定義づけることによって、考古資料を空間情報へ変換するためのものである。遺構の切り合い関係、遺物の共伴関係はこの関係性であり、古墳群・環濠集落といった遺構の集合体もこの関係性データに含まれる。これをデジタル化するためにはマッピング・デバイスが不可欠であり、リモートセンシングやG I Sが該当する。また、近年のC A DソフトウェアにはオーバーレイなどのG I S機能を持たせたものも出てきている。しかし、コンピュータによるデジタル化の及ばないデータもある。それは、手触り・質感などの人間の主観的判断に頼る部分の多いデータである。例えば、「この須恵器は焼成堅緻なので陶邑製と考えられる。」といった文章もデジタル的表現が難しい。ともあれ、すべての考古資料データをデジタル的に表現することはできないにしても、考古資料のデータの位相をデジタル化することは理論的に不可能な作業ではないことが分かる。

(3) セオリーについて

次の問題は、セオリーである。近年、考古学へ理論の必要性が提唱されてから、考古学の関心は遺構・遺物の個別研究と社会考古学的なものへと大きく二分したようだ。「ニュー・アーケオロジー」のうねりの中で、考古資料の個別認識と一般理論とを繋ぐ「中間理論」の重要性が提起されて以来、その方法を私たちはいまだ獲得できないままである。さらに、近年では、考古学の理論的検討が深化するにつれて、考古資料を扱う理論はますます重層的なものとなってきた。考古学研究における理論問題への啓発は、たしかに新しい地平を開拓はしたが、その一方で理論のための理論が準備され、何が事実で何が理論かが見えにくくなっているのも現状である。その反動が、個別研究と理論研究の二極分化を招いているのではないかといいた危惧をおぼえる。元来、事実と理論とは表裏一体というのが道理であるが、学問の個別細分化に比例して、両者が乖離したように見えることは、かならずしも望ましい状態ではないだろう。とはいっても、両者を同一のものとして扱うと、逆に「意味の過剰」を招きやすい。この問題意識をふまえ、セオリーとデータの連携を意識した上で、理論が純粹理論として対象化されることが、これらの位相を分別して格納するアーカイブが必要となる所以である。

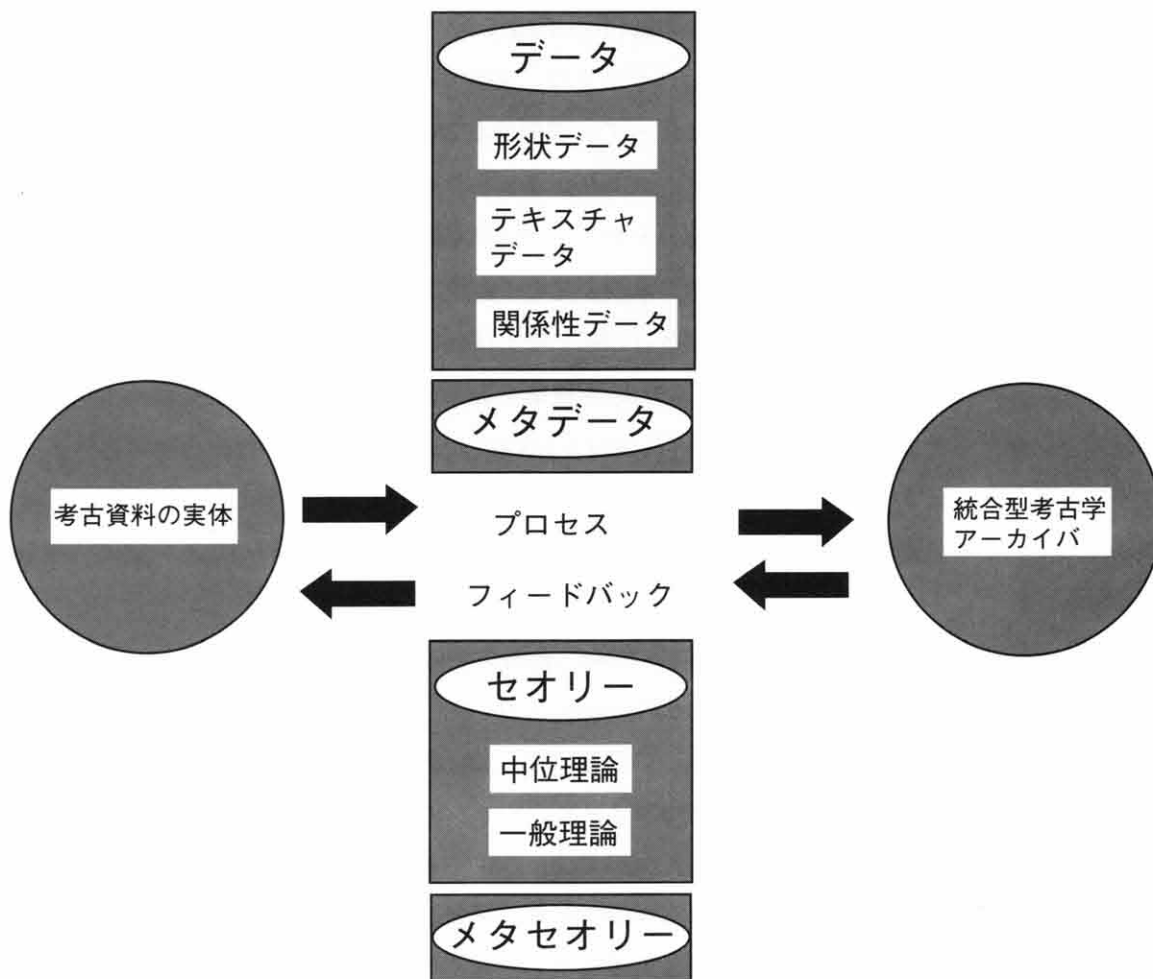
(4) メタセオリー・メタデータについて

メタセオリー・メタデータとは、考古学の議論では最近になって重要性が指摘されてきた。メタセオリーとは、理論のための理論、すなわち、ある理論の背景にあってそれを支えている理論である。これは、ポスト・プロセス考古学の立場から導入され、一種、流行の分析理論となってきた感がある。そこでは、歴史の「虚構性」・「物語性」が指摘され、歴史学における「無垢の喪失」が徐々に進行しているのである。また、メタデータとは、G I Sの側から提起された概念

で、データの背後にあってデータを支えているもの、つまりデータの品質保証のことである。これらが深く認識されていないと同じデータを対象としていても、議論が食い違ってしまう。ただ、これらは考古学的な議論とは異質であるために、同一のアーカイバに格納して良いかどうかは意見の分かれるところであろう。むしろ、データベースの更新logのように、(ハイパー)テキストファイルで保管されるようなものであっても良い。ともあれ、私が提唱する統合型考古学的アーカイバ(クリアリングハウス)の大略は、以上のようなものとして構想したい。

すなわち、経験的に、主体的に取り扱える実体としての考古資料は、空間情報化による情報処理過程によって考古学的アーカイバへと格納されるのであるが、それらは、つねにフィードバックされることによって更新・点検されるものと位置づけたい。

さらに、もっと議論の焦点をしぼって、記録保存との関わりで、さらに議論を深めてみよう。上述のデータと呼んだものに着目すると、さらに4段階の様態を分別することができる。第1段階は、実体としての(生の)考古資料である。しかし、これはすでに述べたように、抽象化されねば、直接の利用はできない。第2段階は、その抽象化によって生成した遺構・遺物のデジタルデータである。これは、考古資料から上述したような方法によって回収されたデータであるが、資料の型式学的検討や歴史的な評価は加えられていないものである。研究者の作業対象がこの段階



第4図 統合型考古学アーカイバの構想

である。第3段階は、報告書のテキスト・図面・写真データなど、実体としての考古資料を考古学の枠組みの中で、再構成したものである。通常、私たちが扱う考古資料の情報は、この段階のものを指す。これも一種の記録保存であるが、より劣化を止めるために、PDF (Portable Document Format) やPhoto CDなどの実用化が進められていることは、すでに述べた。第4段階は、第2段階で回収されたデータをもとにデジタル的に再構成したものである。これを空間情報科学の中に位置づけるためには、サイバースペースの中での主体的な考古学的研究の行為を位置づける必要がある。

4. サイバースペースのヴァーチャル・アーケオロジー

平成9年1月21日～2月28日に、東京大学総合研究博物館において「デジタルミュージアム」と題された展覧会が実施された。^(注19)これは、観覧者が携帯情報端末(PDA)を持ち、実際の展示場を観覧すると同時に、仮想空間(サイバースペース)を自由に移動して、実物の視覚情報だけでは分からないもの、例えば銅鐸の音や法隆寺金堂障壁画の復原CGなど、展示されている遺物を補完する情報を、携帯情報端末によって得ることができるようにしたものである。さらに、デジタルミュージアムを、インターネットなどのコンピュータ・ネットワーク上に構築したヴァーチャル・ミュージアムは、インターネットの閲覧(browsing)技術の飛躍的な向上を背景として、多くのWebサイトで試みられるようになった。そこでは、映像を扱うQuicktime VRやLive Viewer 3D・Real Playerなどのソフトウェアによって、擬似的な3D空間の構築が可能となっている。例えば、韓国の国立木浦大学校博物館はこのようなヴァーチャル・ミュージアムに力を入れている機関の一つであるが、ここでは刊行物のテキストデータを閲覧できるほか、擬似3D化された出土遺物を回転したり、任意方向の遺跡の景観を見ることができるのである。さらにまた、インターネット上の標準的な3D記述言語であるVRMLを使えば、マシンパワーによる制約を別にすれば、より写実的な仮想空間(サイバースペース)を構築することができるだろう。そのサイバースペース上のヴァーチャル・ミュージアムに、CGIやJAVAによって前節で述べた統合型考古学アーカイブの照会システムへのリンクを貼れば、サイバースペース上での考古学的研究も理論的には可能である。その可能性を拓くものとして、「ヴァーチャル・アーケオロジー」が実験的に試みられている。

「ヴァーチャル・アーケオロジー」とは、元来、英国サザンプトン大学(SYASS=Southampton York Archaeological Simulation System Project)において、「Grafland」と名付けられたソフトウェアをもとに、考古学、中でも発掘調査の学習用として考案されたものである。^(注20)つまり、フライトシミュレーターのような実践に先立つシミュレーションである。だが、考古学的デジタル測定技術と3次元CADが発達した現在においては、逆に、発掘調査後に遺跡の様態をデジタル的に復元し、調査の過程を検証することも可能である。発掘調査とは、かつてウィラーが述べたように慎重な破壊の連続であるが、統合型考古学アーカイブによってデジタル情報へと置換されれば、メタデータを保証した上で、任意の断面で図化したり、一部の発掘手順を逆転して写真

画像に仕上げることでさえ無理ではないのである。

5. 空間情報科学から見た歴史学の将来

サイバースペースでの考古学が理論的に可能であると見るなら、私たちは歴史のシミュレーションを行う道が拓けてくる。すでに述べてきたとおり、歴史研究は、時間の連続から任意の部分を取り取ってより詳細な個別事象を明らかにするものではなくて、歴史家の主体的な営為による空間創造の学問であると考えれば、空間情報科学を手段として、歴史をシミュレーションすることは理論的に不可能なことではないように思われる。

従来、数学的に説明された自然現象とは異なり、歴史的事実は一回起的なもので、自然科学のような法則的な理解はできないと考えられてきた。ところが、この考え方は、自然科学的な知識と歴史的事実を質的に同一なものと誤認して成立するものである。そうではない。主体的に認識された歴史的な空間は、歴史家の認識した空間が共有されない限り、客観的事実足り得ないものである。したがって、空間情報科学が目指す指標とは、歴史認識に基づいた空間の創造にほかならない。この意識が欠落し、歴史を単なる事件の連続と捉えてしまえば、歴史研究の本質を自ら見えなくしてしまうのではなからうか。自然科学と人文・社会科学は、論理的に同型的な構造であるという前提は、前世紀以来の科学的思惟の越えられなかった限界であった。そう考えることで、はじめて人文科学と自然科学の垣根を飛び越えることが出来るのではなからうか。歴史は科学であるか否かという問いかけは、もはや意味を持ちえない。歴史は、主体的に関わる以上、何度も読み出し、書きなおすことが可能な、空間認識の連続体である。その展望を、新しく生まれた空間情報科学は示唆しているのである。

本稿は、平成11年度科学研究費補助金(奨励研究(B))「考古資料を空間情報へ変換する研究」の成果の一部である。

(かわの・かずたか=調査第1課資料係調査員)

注1 インターネット上のWebサイト：<http://deathstar.rutgers.edu/projects/france/france.html>

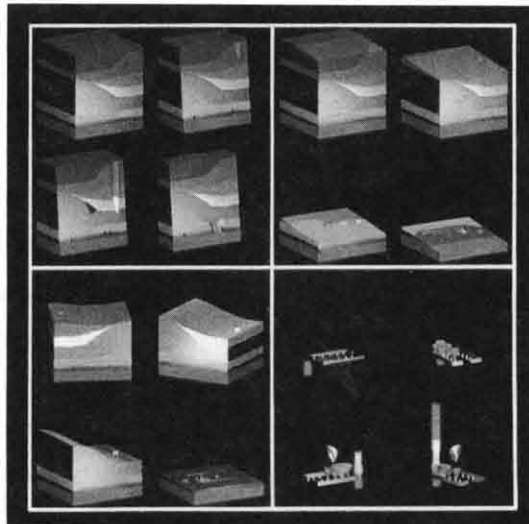
注2 矢野桂司『地理情報システムの世界 GISで何が出来るか』ニュートンプレス選書 1999, P25-27.

注3 永原慶二「戦後日本史学の展開と諸潮流」(『岩波講座 日本歴史』24 別巻1 岩波書店) 1977

注4 歴史学研究会『時代区分上の理論的諸問題』岩波書店 1956

注5 インターネット上のWebサイト：<http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/japanese/>

注6 岩井 哲・亀田弘行・碓井照子・盛川 仁「1995年兵庫県南部地震による西宮市の都市施設被害の



第5図 Graflandソフトウェア
(注20書Colour Figure12.1より)

- G I Sデータベース化と多重分析」(『G I S－理論と応用－』4-2 地理情報システム学会) 1996
- 注7 森本 晋「C A A92参加記」(『考古学研究』第39巻第1号 考古学研究会) 1992
- 注8 新納 泉・金田明大・松下 修「地理情報システム利用の試み」(『考古学研究』42-3 考古学研究会) 1995
- 注9 行政O A地図システムセミナー'99実行委員会『行政O A地図セミナー』 1999
- 注10 大垣市教育委員会『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』 大垣市教育委員会 1997
- 注11 インターネット上のWebサイト：<http://www.afsoft.com/>
- 注12 インターネット上のWebサイト：<http://www.sbg.ac.at/geo/idrisi/wwwtutor/tuthome.htm>
- 注13 インターネット上のWebサイト：<http://intarch.ac.uk/>
- 注14 インターネット上のWebサイト：<http://arch.soton.ac.uk/>
- 注15 インターネット上のWebサイト：<http://natmus.min.dk/cidoc/archsite/coredata/archst0.htm>、なお、邦訳をDigital Archaeology Resources in Japan(<http://www.amy.hi-ho.ne.jp/mizuy/>)により知ることができた。
- 注16 『三次元形状計測による文化財データ保存システム構築と活用－考古学分野を中心として－』平成7－8年度文部省科学研究費補助金 基盤研究(A)(2) 研究報告書 1997
- 注17 河野一隆「府内遺跡紹介 84. 保津山古墳－失われた遺跡を復原する－」(『京都府埋蔵文化財情報』第72号) 1999
- 注18 佐々木憲一「日本考古学における「理論」の役割－文献史とのよりよい協業を目指して－」(『物質文化』第67号 物質文化研究会) 1999
- 注19 インターネット上のWebサイト：<http://www.um.u-tokyo.ac.jp>
- 注20 Paul Reilly and Sebastian Rahtz ed, Archaeology and the Information Age -A global perspective- One World Archaeology, Routledge London, 1992
- 注21 R. E. Mortimer Wheeler, Archaeology from the Earth, 1954

補記 本稿脱稿後のため詳細は言及できなかったが、東京大学総合研究博物館(2000年3月1日～4月28日)および国立歴史民俗博物館(2000年2月29日～4月30日)において、『縄文の記憶 デジタルミュージアム共同実験』と題された展覧会が開かれ、インターネット上でもホームページが設けられた(<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/dm2k-umdb/>)。また、東京大学では「文化資源学研究」という専門課程が誕生し、「物」に即した研究とその有効な活用法が探求されている。埋蔵文化財は、従来、考古学とその関連自然科学が取り扱っていたが、本稿で述べたように、人文科学・社会科学・自然科学の枠組みを越えた「新しい学」へのあゆみは、着実に始まっている。

平成11年度発掘調査略報

41. 南稲葉遺跡

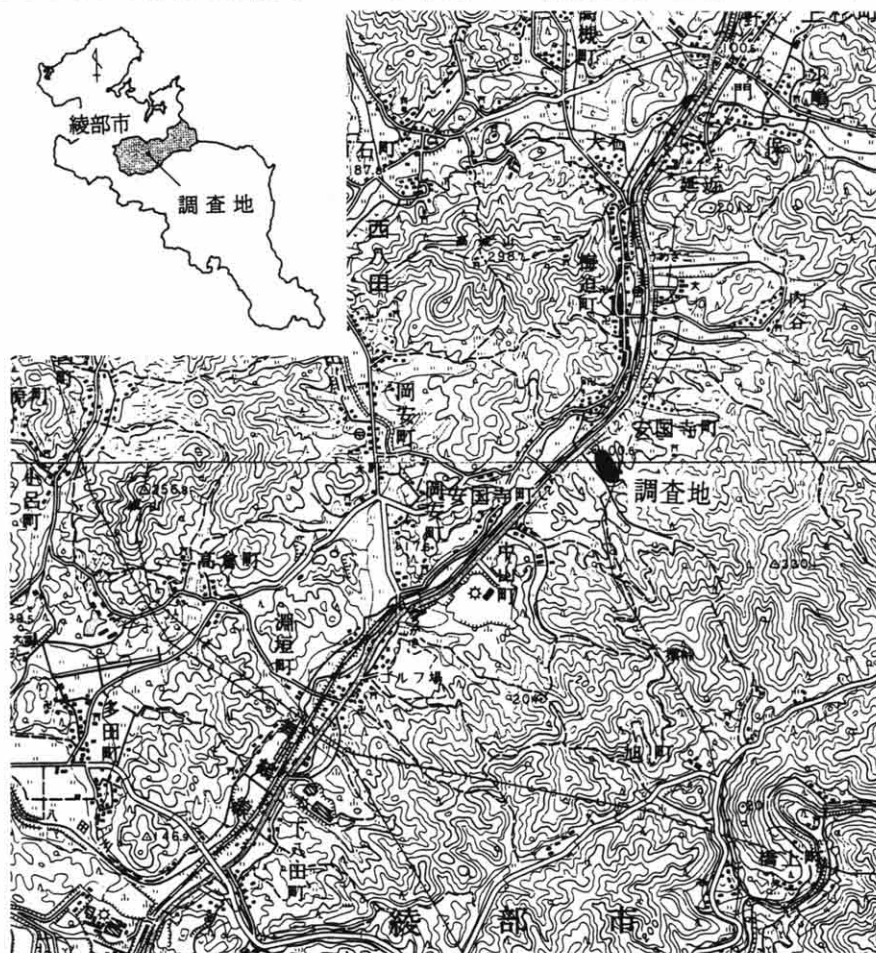
所在地 京都府綾部市安国寺町字南稲葉

調査期間 平成11年10月20日～平成12年3月3日

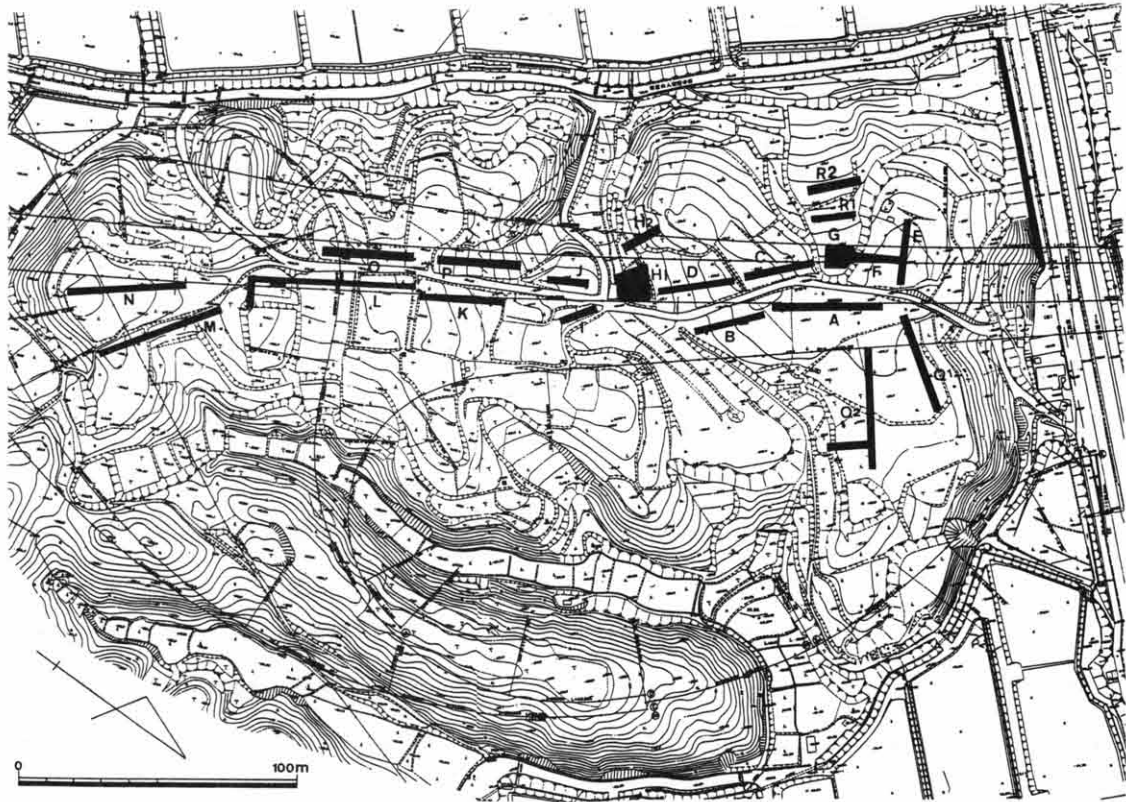
調査面積 約1,200㎡

はじめに 今回の調査は建設省近畿地方建設局の依頼を受け、京都縦貫自動車道建設工事に伴って実施したものである。調査地は、綾部市北東部を流れる八田川の中流域に位置している。この地域は八田川下流域(久田山丘陵～吉見盆地)や上流域(高槻・上杉町付近)と比較して、これまで遺跡調査例の少ないところである。南稲葉遺跡は当地の丘陵部一帯に五輪塔・一石五輪塔・石仏などが点在する中世墓地として周知された遺跡である。調査地内には、散布していた石仏や五輪塔を集めて安置したとみられる部分を確認している。標高100m前後を測る丘陵上は、いくつかの浅谷による起伏は見られるが、全体に台地状の平坦地が広々と展開している。また調査地から平野部への眺望は良好である。調査地は丘陵先端部から、丘陵奥へ約200m入った所までの広い範囲に及ぶ。

調査概要 今回の試掘調査では、広く起伏のある丘陵上および浅谷部に細長いトレンチ(合計1,200㎡)を掘削し、遺構・遺物の確認に努めた(第2図)。そ



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 トレンチ配置図

の結果およそ半分のトレンチから何らかの遺構や遺物が得られた。多くの遺構・遺物を確認したのはGトレンチである。竪穴式住居跡・柱穴痕・溝などの顕著な遺構を検出した。またそれらの遺構に伴う多量の土器(須恵器・土師器)がある。出土遺物の年代は、主に飛鳥時代後半(7世紀前半)～平安時代前半(9世紀前半)にかけてのもので幅がある。したがって、竪穴式住居跡・建物に伴う柱穴痕の時期もその幅に収まるものといえる。竪穴式住居跡は、2基が切り合いをもって重なっている。ともに後世の削平を受けているが、1基は一辺5m・深さ10cmほどを測る。東側の長辺中央部に土師器の集積と焼土の範囲を検出している。もう1基は、西側を大きく谷状の落込みによって消失している。東側の一辺は、およそ4m・深さ数cmを測る。住居跡の構造や建物跡の抽出、それらの時期などについては今一度検討したい。R-2トレンチについては、その中間部で2m以上の谷部の深い堆積(包含層)がみられ、そこから多量の須恵器・土師器が出土している。時期はおよそ8世紀のものが中心である。

まとめ 今回の試掘調査において、当初に予想していた中世墓群についてはその片鱗さえ検出していない。調査区のHトレンチより南側については、トレンチ内で捉えた浅谷に溜まった堆積層から若干の遺物(奈良～平安時代)が出土した。調査地の丘陵先端部側のR・G両トレンチでは遺構(竪穴式住居跡・溝・柱穴)や遺物(須恵器・土師器)を確認した。主に飛鳥時代～平安時代に営まれた集落に伴うと考える。次年度の本格調査で詳細を明らかにしていきたい。

(黒坪一樹)

42. ^{すぎ}きた 杉北遺跡

所在地 京都府亀岡市旭町杉
 調査期間 平成11年11月29日～平成12年1月14日
 調査面積 約500m²

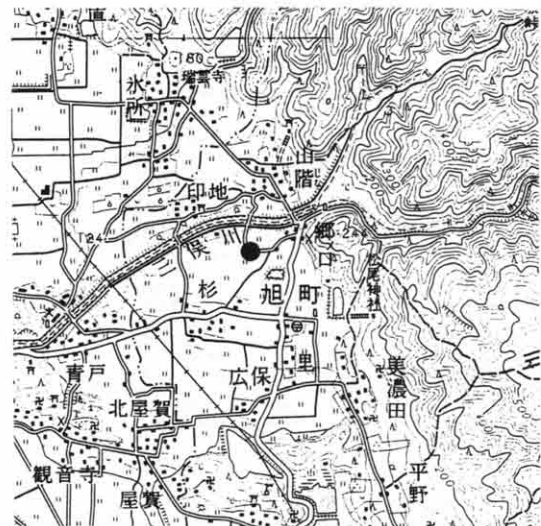
はじめに 杉北遺跡の発掘調査は、府営ほ場整備事業(三俣地区)に先立ち、京都府農林水産部の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。

調査概要 発掘調査トレンチは、北から第1・2・3トレンチと名付けた。基本層序は、最上層が耕作土、その下は床土、更に下層では部分的にマンガンを多く含む暗褐色の礫混じり層が、暗褐色粘砂質土を覆っている。暗褐色粘砂質土の下層は、暗黄褐色粘砂質土さらに下層は砂礫堆積となる。

第1トレンチは東西約5m・南北30mの調査区である。暗黄褐色粘砂質土上面において、遺構らしき輪郭が亀岡市の試掘調査同様、多く認められたが、上層の褐色粘質土が、層理面の凹面に入り遺構状に見えたことが、遺構精査の結果明らかになった。第2トレンチは、東西約5m・南北30mの調査区である。暗褐色の礫混じり層が掘り込んだ砂礫を包含する旧流路跡が、床土面下層から検出できた。その下には他の調査区同様暗黄褐色粘砂質土があるが、部分的に暗黄褐色粘砂質土検出面にまで下層の砂礫堆積が露出していた。床土からは土師器片・炉壁と考えられる破片が出土している。第3トレンチは、東西約20m・南北10mの調査区である。暗黄褐色粘砂質土の上面で遺構精査を実施した結果、柱穴と考えられる遺構を2か所検出した。暗黄褐色粘砂質土を部分的に掘り下げた結果、縄文土器片が出土し、焼土塊・炭化物も含まれていることが分かった。刻みを持つ突帯が2条認められる個体、外面に条痕の有るものなどがある。この包含層の下層には人頭大から拳大の礫層があり、扇状地性の礫と考えられる。

まとめ 遺構の性格を特定できるものは検出できなかったが、縄文時代にさかのぼる土器片が出土しており、近接する地域に、同時期の遺跡があったことを示している。床土中の奈良・平安時代の遺物の存在は、水田造成時に近辺の遺跡が破壊されたことを示しているのかもしれない。

(中川和哉)



調査地位置図(1/50,000)

43. ^{いち だ さい とう ほう}市田齊当坊遺跡第2次(C2地区)

所在地 京都府久世郡久御山町市田新珠城

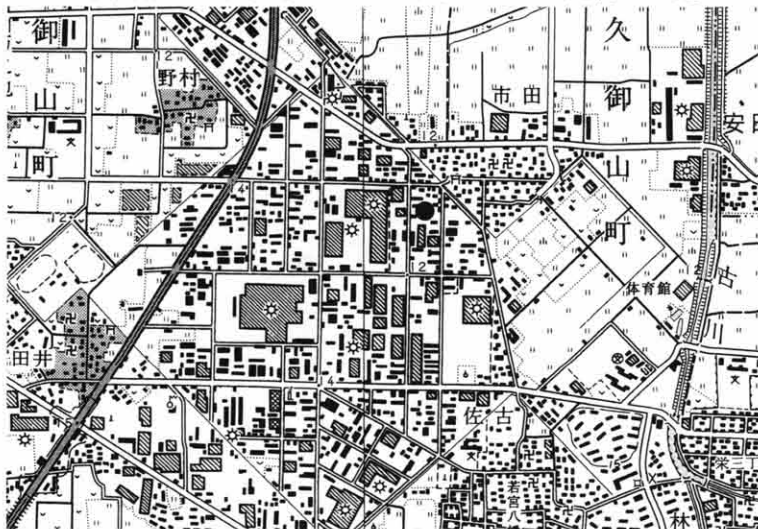
調査期間 平成11年5月14日～10月14日

調査面積 約1,800m²

はじめに 市田齊当坊遺跡は旧巨椋池の南畔に位置しており、従来、遺跡の分布が希薄なところと考えられてきた。しかしながら、国道1号京都南道路および第二京阪道路の建設に伴い、路線計画地内の試掘調査を行い、市田齊当坊遺跡の存在が明らかとなった。同遺跡の昨年度の調査では、全域で弥生時代の集落遺構と条里型地割りにのる平安時代末頃の道路遺構を検出した。今回は昨年度に引き続く調査で、調査地はC地区の南半に当たり、弥生時代中期の環濠や方形周溝墓が分布する居住域と墓域の境界付近に位置する。今回の調査は建設省の依頼により実施した。

調査の概要 調査は、中世遺構面と弥生時代遺構面の2面で調査を行った。上面の奈良時代～平安時代末の遺構面では、昨年度と同様、条里型地割りに合致する南北・東西の坪境道路と小溝群、下面の弥生～古墳時代の遺構面では、竪穴式住居跡・方形周溝墓・環濠・井戸のほか、土坑・小ピット、昨年度に検出した古墳周濠の延長部分などを検出した。

竪穴式住居跡は弥生時代中期全般にわたるもので、昨年度の調査成果を合わせると、環濠SD025・090・114より北側では、5～6基の住居跡が重複しているが、南側では、住居跡どうしの重複はなく、単独で検出されている。竪穴式住居跡SH451は、床面上で碧玉原石・砥石・石鋸など玉作り関連の遺物が多く出土し、玉作りがこの住居で行われたことが確実視される。方形周溝墓は弥生時代中期前半のもので、一辺9m以上の大形のものの一辺5m程度の小形のものがあり、重複関係から、大形のもの小形のものに先行して造られていることがわかる。環濠は弥生



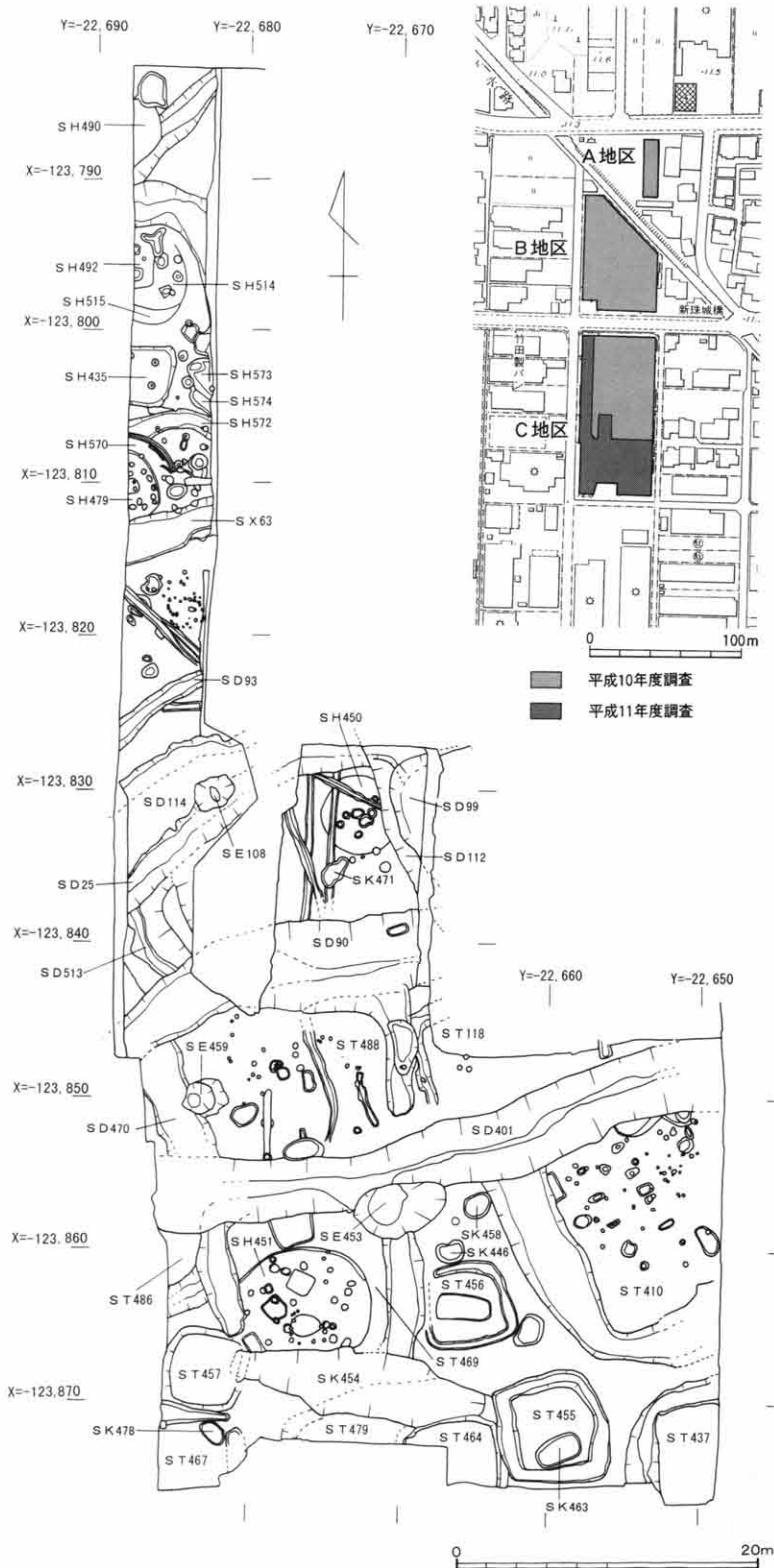
第1図 調査地位置図(1/25,000)

時代中期後半で、今回新たに1条を検出し、集落の南辺には、3～4条の環濠が掘削されていたことを確認した。SE453は、弥生時代中期前葉の井戸で、SH451の東側で、環濠SD401と一部重複して検出した。径約6m・深さ約1.5mのすり鉢状の坑の底に、一辺約1m・深さ約0.7mの方形の坑を穿ち、土壁の崩落をまず

横板で押さえ、次いで縦板を並べ、その内側最下部に結合した横棧を組み、井戸枠を構築している。

まとめ 南山城地域最大級の弥生集落である市田齊当坊遺跡では、集落の南辺に、3～4条の環濠が掘削されていることが判明した。また、集落の南側には、方形周溝墓を中心とした墓域が広がっており、遺構の切り合い関係から、居住域から墓域へと、土地の利用形態が変化したことが分かった。さらに、弥生時代中期前葉に遡る木組みの井戸は、全国的にも最古級のもので、その構造上の系譜や弥生集落における井戸の意義について、再考を促す資料となろう。

(岩松 保)



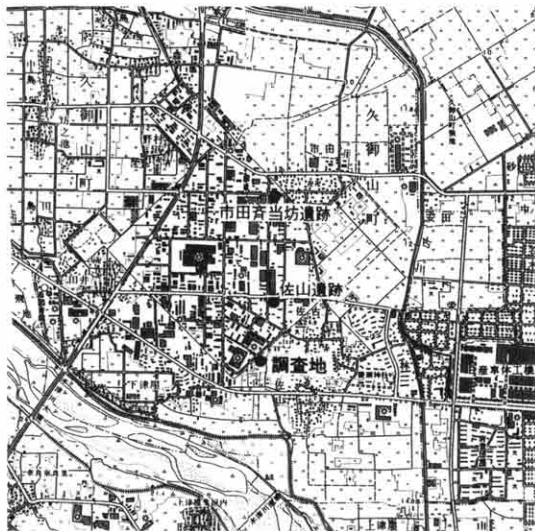
第2図 調査トレンチ実測図

44. 佐山^さ山^{やま}尼^{あま}垣^{がい}外^と遺跡

所在地 京都府久世郡久御山町佐山小字尼垣外他
 調査期間 平成11年6月21日～平成12年2月28日
 調査面積 約5,000m²

はじめに 佐山尼垣外遺跡は、木津川右岸の自然堤防状の微高地上に立地し、その北方には、旧巨椋池の干拓地が広がる、南山城では最も低位に位置する。遺跡周辺には、弥生時代中期の大規模な集落跡である市田齊当坊遺跡や、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡と考えられる佐山遺跡などが存在し、弥生時代以降の人々の生活痕跡を示す遺構や遺物が、多数見ついている。今回の調査は、国道1号京都南道路および第二京阪道路建設に伴うもので、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。調査は便宜上、A地区、B地区の東西2地区に分けて行ったが、今回は先行して実施したA地区について成果を報告する。

調査概要 検出した遺構は、おもに中世と弥生時代中期を中心とする時期に大別できる。両遺構は、ほぼ同一遺構面において検出したものであり、弥生時代を中心とする遺構の多くは、後世に削平を受けたと考えられる。中世の遺構としては調査地を南北に縦断する約40条の耕作溝や区画溝を、また平安時代初頭の溝跡などを検出した。耕作溝や区画溝はいずれも真北に方位を揃えており、久世郡条里に規制されたものと考えられる。溝内からは平安時代末～鎌倉時代の瓦器椀、土師皿等が出土した。また、平安時代初頭の溝跡からは須恵器壺、杯身等が出土した。弥生時代を中心とする遺構グループには溝跡・竪穴式住居跡・方形周溝墓などがある。溝跡は調査地を北西から南東にかけて斜めに縦断し、幅約1～1.7m・深さ70cm・全長50mを測る。その規模の大き



第1図 調査地位置図(1/50,000)

きさや「V」字形断面を呈することから、溝跡は環壕であった可能性も考えられる。出土した甕形土器の特徴から見て、この溝跡の時期は庄内式併行期を下らない。竪穴式住居跡は調査地南域で3基を検出した。3基は互いに重複しており、うち最も古い住居跡内からは、弥生時代中期後葉の土器が出土した。方形周溝墓は調査地北域で5基、南域で2基を検出した。周溝墓は北西～南東方向に主軸を振っており、いずれも後世の削平により主体部は検出できなかった。うち北域の方形周溝墓ST101は、一辺約12mの規模で、周溝内からは弥生時代中期後葉の壺形・甕形・高杯形土器などが、

ほぼ完形で出土した。また、南域の溝跡S D 097とS D 119は、中央を中世の南北溝で分断されているが、遺構プラン・埋土・土器の出土状況などから一連の方形周溝墓と考えられる。これらの溝跡から、完形の細頸壺形土器や大型の壺形土器など、弥生時代中期後葉の土器がまとまって出土した。

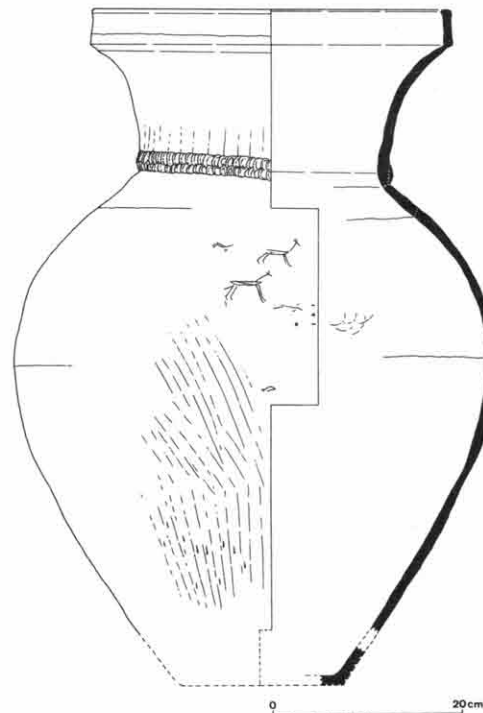
これらの遺物中、最も注目すべきは鹿を線刻した絵画土器である。絵画土器は、壺形土器で、溝S D 119の南肩部付近から折り重なるように破碎された状態で出土した。相伴土器の出土状況からも、この土器は葬送儀礼に伴う供献土器の可能性が高い。土器は、口縁部径36cm・体部最大径47cm・器高70cmを測る広口壺形土器に復元でき、全体の約七割程度が残存する(第2図)。

絵画は土器の肩部～中央部の破片外面に、シャープなヘラ状工具により線刻されている。構図は3頭の鹿が右向きに疾走する様を側面から描いており、うち二頭は、二本の直線で角部を、一本の直線で頭部を簡略化して描き、明瞭に鹿と判断できる。他の一頭も頭部が不明であるが、全体の構成から見て鹿と考へても、大過あるまい。三頭は頸部～胴部下半を弧状線で、背中～尻尾部は直線で描き、前・後脚は、胴部下端左右からそれぞれ外側下方に向かって延びる二本の直線によって表されている。

角部を有する二頭については前脚先端は前方へ屈曲あるいは外反し、後脚先端は前方へ屈折あるいは下向きの単線で描くなどして蹄部を表している。また体部には一条の沈線が横位に描かれ、後脚後方には、胴部下端から左側下方に向けて延びる一条もしくは二条の沈線が描かれているが、これらが何を表しているかは現在のところ判明しない。そのほか、角部を有する二頭の鹿の上下方や前方には幾つかの単線や曲線が刻されているが、これらが絵画や記号なのか、あるいは描写途中かは要領を得ない。

まとめ A地区の調査では弥生時代から中世にかけての遺構を検出した。特に方形周溝墓や竪穴式住居跡内から出土した遺物の多くが弥生時代中期後葉のものであることから、当該期、調査地周辺には集落や墓域が形成されていた可能性が高い。とりわけ絵画土器は京都府内でも出土例が少なく、当時の人々の生活を考える上でも貴重な資料が得られた。また平安時代～中世では、久世郡条里に規制された多数の溝が掘られ、耕作地として利用されたことも明らかとなった。調査は現在、東側のB地区を対象に行っており、弥生時代中期や同後期の方形周溝墓、中世の坪境道、畝溝群などを検出している。

(中村周平)



第2図 壺形絵画土器

45. 佐^さ山^{やま}遺跡

所在地 京都府久世郡久御山町佐古小字外屋敷

調査期間 平成11年9月8日～平成12年1月14日

調査面積 約3,500m²

はじめに 今回の発掘調査は国道1号京都南道路および第二京阪自動車道建設に先立ち、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。佐山遺跡は弥生時代末～古墳時代前期を中心とする集落跡と、中世の遺構も多数存在する複合遺跡である。遺跡は、山城盆地のほぼ中央部、木津川と宇治川に挟まれた山城盆地内でも特に低地(海拔約13m付近)となる地点に位置する。遺跡の北側には過去、宇治川遊水池として機能した巨椋池が存在し、この大池と南側を流れる木津川間の微高地上に遺跡が営まれている。今回の調査は調査対象地の北部域(東西約42m×南北約83m)を対象に実施し、中世遺構面の調査を終了した。

調査概要 厚い盛土層を含む地表下約2m付近まで重機による土砂除去を実施したところ、海拔約10.5m付近において古墳時代前期の遺構が残る中世島畠跡と、周囲をめぐる水田土壌の広がりを確認した。東西方向に主軸を取る島畠は調査地中央部に存在し、島畠の東部域が今回調査で検出できた。また、水田域は島畠の西側を除く南北と東側に展開している。

主要遺構として、島畠の東側と南側の水田域から条里関連の溝群を検出した。この溝群は検出状況から坪境道および里道に伴う側溝と判断される。溝及び水田最下層付近から13世紀の瓦器碗の出土をみている。

まとめ 中世遺構面で検出した道路遺構は久世郡条里に伴うものであり、側溝とみる溝の間隔から調査地東部を南北に貫く幅1m前後の狭い道路遺構は坪境と判断している。調査地南部の東西方向の道路遺構は、坪界道の数倍(3～4倍)の規模を測ることから、条里区画の道路と判断されるものである。



調査地位置図(1/50,000)

条里関連の道路遺構は、京都南道路関連で併行して調査している市田齊当坊遺跡・佐山尼垣外遺跡調査でも検出されている。3遺跡とも条里の里道と坪境道との交点が検出されており、久世郡条里の姿が次第に明らかに成りつつある。

なお、古墳時代集落跡については、関係諸機関と協議のうえ、次年度に調査を行うこととなった。

(竹原一彦)

46. ^{かす}が 春日神社遺跡

所在地 京都府相楽郡精華町大字菱田小字宮川原

調査期間 平成11年11月18日～12月16日

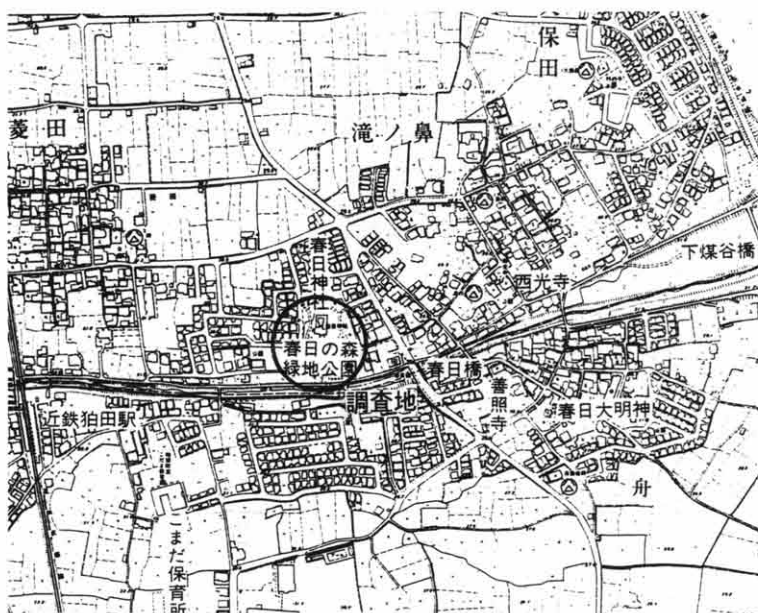
調査面積 約360m²

はじめに 春日神社遺跡は中世を中心とする集落跡で、精華町北部の菱田の旧集落の東方に鎮座する春日神社の境内を中心とする遺跡である。春日神社の本殿は奈良の春日大社若宮社の社殿を譲り受けたもので、その建築様式から室町時代に遡ると考えられ、府の重要文化財に指定されている。今回の調査は一級河川煤谷川の河川整備促進事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査地は煤谷川北岸の堤防を含む一帯で、調査前は雑木林および竹藪であった。調査は6か所のトレンチを設定して行った。いずれのトレンチでも河川堆積による砂が厚く堆積しており、掘削深度約3mで湧水層に達した。第1・第5トレンチにおいて、表土下約1mで比較的安定した面が存在したので遺構検出を試みたが、生活面としての機能は認められず、遺構は確認できなかった。各トレンチで河川堆積の砂層から江戸時代以降の信楽焼・土師器の破片や瓦がわずかに出土しているが、いずれも摩滅が激しく上流域から流れてきたものと考えられる。

まとめ 今回の調査では、顕著な遺構・遺構面は無く、煤谷川の河川堆積である砂層を確認したのみであった。煤谷川は天井川で、文献資料によるとしばしば堤防が決壊し周辺の集落に洪水をもたらしていたようである。また、煤谷川の上流にある煤谷山は土砂留山であったが、江戸時代中期に田畑の乱開発が行われて多量の土砂を下流にもたらす原因となり周辺の村落間で論争がおきている。今回確認した河川堆積層は混入遺物から江戸時代以降の洪水によるものと推測され、上流域での開発が下流域におよぼした自然災害の痕跡といえる。また、考古学的に神社の起源を明らかにすることはできなかった。

(松尾史子)



調査地位置図(1/10,000)

47. 木津城山遺跡

所在地 京都府相楽郡木津町木津小字片山・同内田山

調査期間 平成11年4月12日～12年2月28日

調査面積 約2,300m²

はじめに この調査は、都市基盤整備公団(住宅・都市整備公団の解散に伴う新設、事業移管)による関西文化学術研究都市建設予定地内における発掘調査である。木津城山遺跡の調査は平成9・10年度に行われており、これまでに竪穴式住居跡21基・方形台状墓2基などが検出された。

調査概要 木津城山遺跡は、木津町の東丘陵上に位置し、南北に連なる城山の標高約80～100mを測る稜線上に立地している。標高105mの山頂には、木津城(山城)が築城されており、同遺跡は保存が確定しているため、その南北において調査を行った。

北地区では、試掘トレンチを8か所に設定した。丘陵の鞍部にあたる14・15トレンチでは、環壕、竪穴式住居4基とその造成面と考えられる4段のテラス状地形を検出した。谷部にあたる16トレンチでは、環壕の崖面と、谷側のテラス部分で壺・甕・高杯を置いた遺構S X05・04などを検出した。西斜面に設定した20トレンチでは、標高93～95mで崖面を検出した。

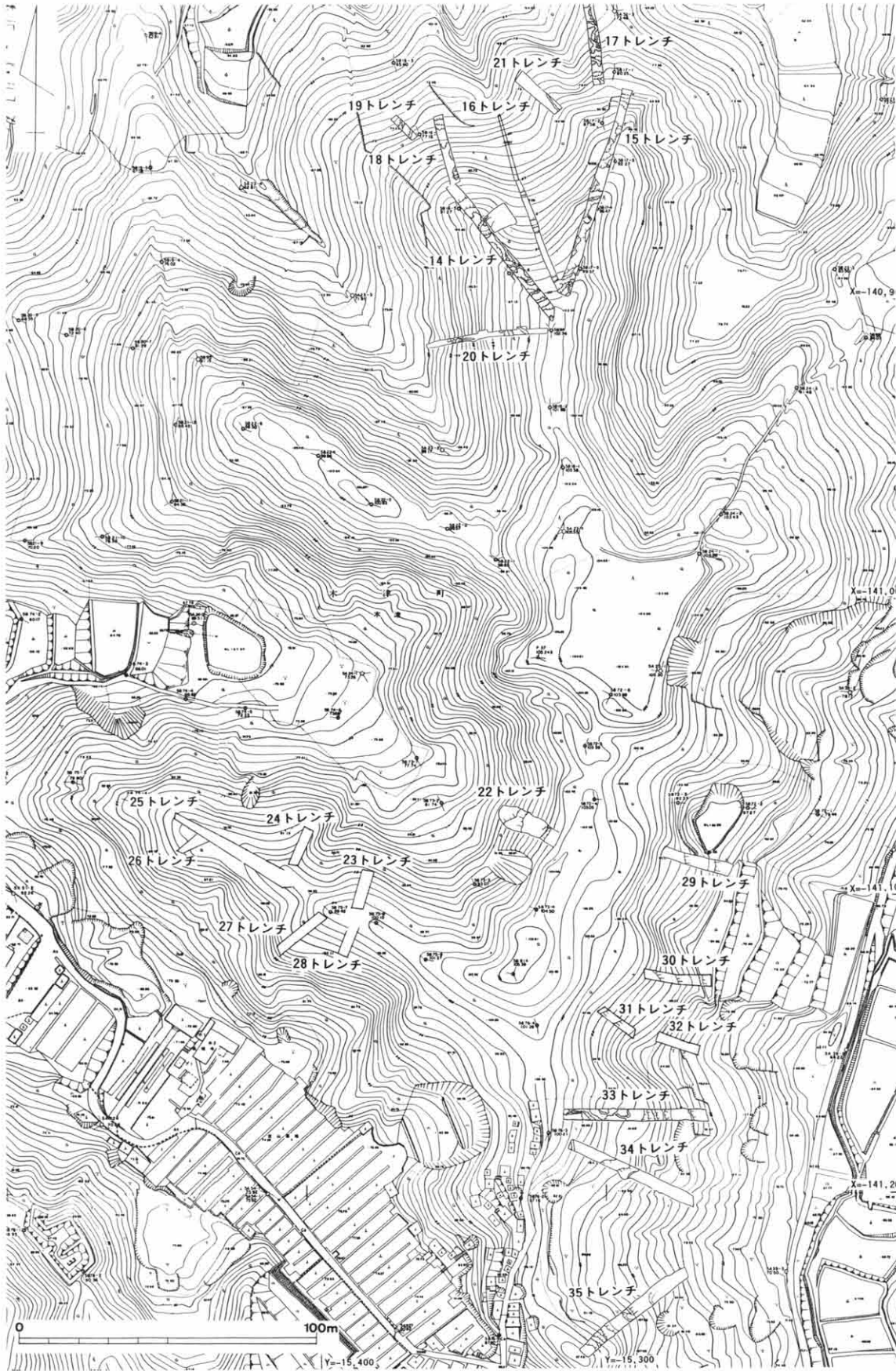
南地区では、第22～35トレンチの14か所を設定した。丘陵の東斜面に設定した29～31、33～35トレンチでは、標高85～90mで岩盤の露頭する崖面の削りだしと、その裾部で幅1.0～1.5mのテラスを検出した。23～28トレンチでは、崖面の削りだしを検出しているものの、下面のテラスや堀切を検出するには至っていない。22トレンチでは、2段の削りだしを検出し、さらに両者の間のテラス部で、幅約3.0m・深さ約0.6mの堀を検出している。環壕関係以外の遺構としては、23トレンチで住居状テラスと、34トレンチで幅約0.5m・深さ約0.3mを測る溝を検出し、溝内からは須恵器や弥生土器が出土している。

まとめ これらの調査成果から木津城山遺跡では、集落を囲郭する施設(環壕)が造成されていることが明らかとなった。すなわち、勾配の急な斜面に接する地点で、岩盤の露頭する地層を選択し環壕を掘削している。



第1図 調査地位位置図

(戸原和人)



第2図 木津城山遺跡範囲確認調査位置図(1/2,000)

48. うちだやま 内田山遺跡・うちだやま 内田山B1号墳

所在地 京都府相楽郡木津町木津内田山
調査期間 平成11年9月1日～12月20日
調査面積 約700m²

はじめに 内田山遺跡・内田山B1号墳の調査は、「関西文化学術研究都市」の整備事業に伴い、都市基盤整備公団の依頼を受けて実施したものである。内田山遺跡・内田山B1号墳は、木津町の東部の、西に向かってのびる丘陵の先端に位置し、平野部との比高差は20m前後を測る。これまで、須恵器・土師器・埴輪などの遺物散布地として知られていた。

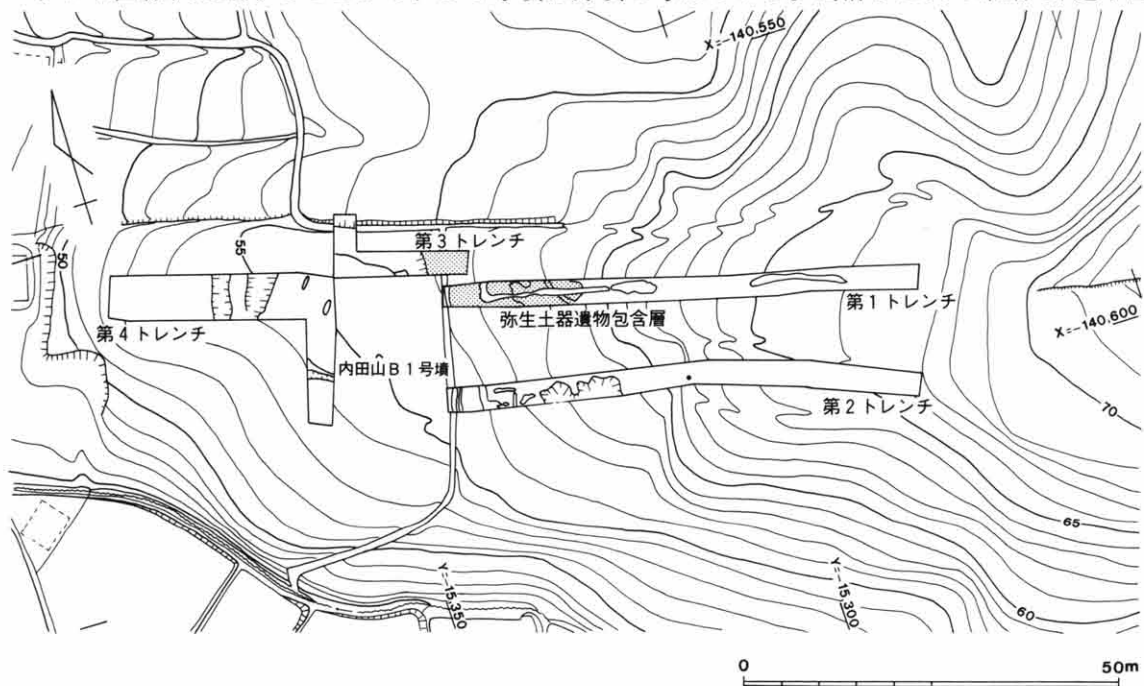
調査の概要 今回の調査は、遺跡の範囲やその内容の確認を目的として試掘調査を行った。調査対象地内に4か所の試掘トレンチを設けて、調査を行った。

①内田山遺跡

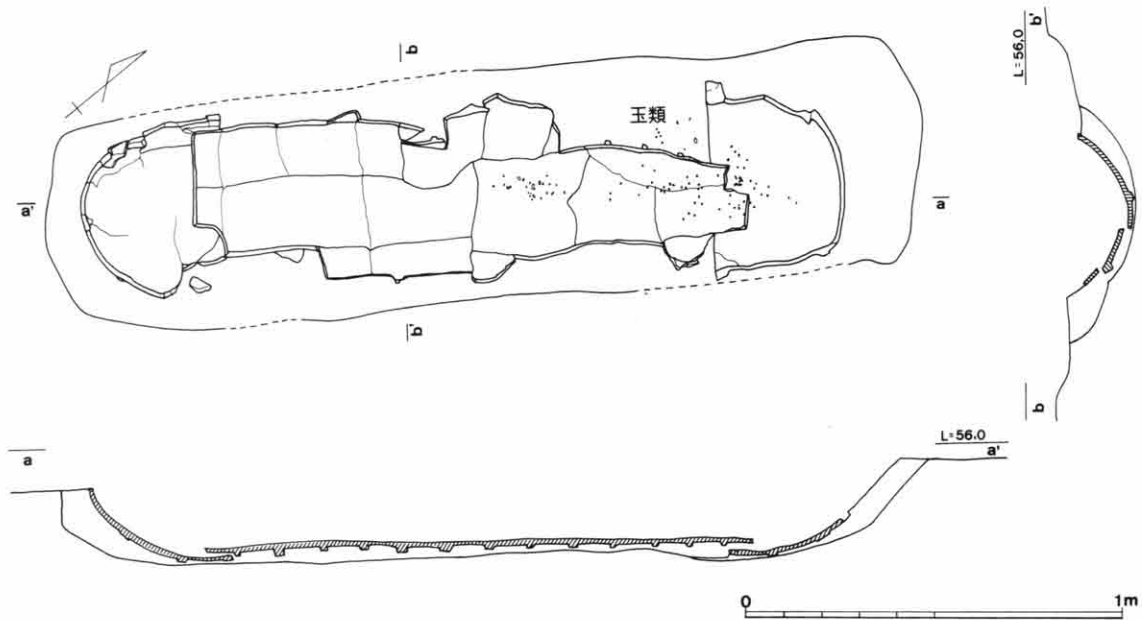
顕著な遺構は確認されなかったが、各トレンチから須恵器・土師器・弥生土器などが出土した。土師器の詳細な時期は不明であるが、須恵器は奈良時代、弥生土器は弥生時代後期にそれぞれ位置づけられる。また、第2トレンチの中央付近でも埴輪片が出土した。

②内田山B1号墳

墳丘 調査前の状況から、直径約20mの円墳と予想されたが、周溝・墳丘裾をそれぞれ検出し、いずれも直線状を呈することから、B1号墳は方墳と考えられる。周溝SD84の東端で「造り出



第1図 内田山遺跡トレンチ配置図



第2図 内田山B 1号墳埴輪棺1実測図

し]もしくは「陸橋」状の高まりを検出したので、B 1号墳のコーナーと判断した。以上に検出された遺構から内田山B 1号墳は一辺15~18mの小型の方墳であることが明らかになった。

埋葬施設 今回の調査では、墳頂部で埋葬施設として、埴輪棺2基を検出した。

埴輪棺1は、全長2.4m・幅0.6mの墓壇に、特製埴輪棺を納める。特製棺は棺身と蓋からなる。棺身は全長2.0m・残存幅0.53mを測り、専用の蓋で小口部分を閉塞する。副葬品として管玉・棗玉・白玉などの玉類が170点あまり出土した。

埴輪棺2は、全長2.3m・幅0.7mの墓壇に、普通円筒埴輪を棺身に転用し、朝顔形円筒埴輪の口縁部で小口部分を閉塞する。棺身は後世の耕作などによって南側2/3が抜き取られており、残存長0.55m・幅0.48mを測る。副葬品などはなかった。埴輪棺の周囲には粘土による裏込めが確認できたが、棺床にまでは及ばない。

出土遺物 周溝S D84や、第4トレンチで検出した西辺の墳丘裾S X89では、多数の埴輪片(円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪など)が出土した。また、周溝S D84からは埴輪とともに鉾形の不明鉄製品4点が出土した。また、埴輪棺1からは玉類が約150点出土した。

まとめ 内田山遺跡では、新たに弥生土器が出土したことから、弥生時代の遺構の存在が想定される。また、第2トレンチ中央付近で埴輪片が出土したことや、B 1号墳の西側で溝を検出したことから、周辺にB 1号墳以外の古墳の存在が想定される。

内田山B 1号墳は、一辺15~18mの方墳であることが明らかになった。また、埴輪棺1に使用された特製棺は、大阪府藤井寺市土師の里8号墳に近接して検出された特製棺などに類似し、古墳時代中期前半頃に築造されたと考えられる。この埋葬施設から170点あまりの玉類が出土したが、これほど多くの玉類が出土した例はなく、今後の検討が必要である。

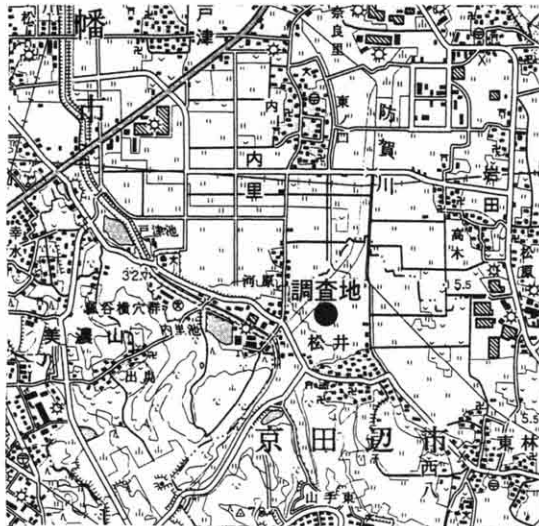
(筒井崇史)

49. ^{しん でん}新田遺跡第5次

所在地 京都府京田辺市松井北ヶ市
 調査期間 平成11年11月10日～平成12年2月28日
 調査面積 約1,000m²

はじめに 今回の発掘調査は、府営ほ場整備(大住地区)事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。新田遺跡は、美濃山丘陵から出て北上する大谷川の縁辺部、標高20m前後の低位段丘上に位置する。過去数回の分布・発掘調査の成果では弥生～中世の複合遺跡として知られている。周辺には、松井・荒坂・女谷横穴墓等、横穴墓群が散在する。

調査概要 今回の調査では、京田辺市教育委員会の試掘調査成果を基にしてトレンチを設定した。基本的な土層堆積状況は、表土(現水田耕作土)、中・近世耕作土、暗茶褐色土(平安時代の遺物包含層)であり、次の黄褐色土が遺構の基盤層である。この層の上面(表土下60cm)より大半の遺構が検出された。主な遺構は、平安時代の水田に伴う素掘り溝群、奈良時代の大溝、掘立柱建物跡、土坑、飛鳥時代・古墳時代後期の竪穴式住居跡などである。大溝はトレンチ南半を東西に流れる溝幅3～4m・深さ1.2m、断面「V」字形を呈する溝である。溝の堆積土は茶褐色粘質土の単一層で、摩耗していない土器類が混在しており、短期間に埋没したものと思われる。出土遺物は奈良時代の須恵器杯、甕、硯、土師器杯、甕等がある。また、飛鳥時代の須恵器、土師器等も数多く出土している。掘立柱建物跡は4棟復原できるが、梁行2間、桁行3間以上、柱掘形一辺50cmを測る。建物の方位はさまざまであり、建て替え、併存については判然としない。竪穴式住居跡はトレンチ全域で15基確認できた。平面形は方形を呈し、3m×3.3m程度のものが大半である。竈は北西・南西の壁に接している。出土遺物は、住居の埋土中に飛鳥時代の土師器杯・須恵器杯などがある。住居跡は2～3棟重複しており、おおむね飛鳥時代のものである。



調査地位置図(1/50,000)

まとめ 今回の調査の結果、新田遺跡では上記の遺構、遺物が纏まって出土した。これは遺跡の空白を埋めるばかりでなく、周辺の遺跡(横穴群)との関連を研究するうえで重要な資料である。

(竹井治雄)

50. ^{しん でん}新田遺跡第6次

所在地 京都府京田辺市松井

調査期間 平成11年11月18日～平成12年1月28日

調査面積 約300m²

はじめに この調査は、農業基盤整備関係道路改良工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。工事対象地は、東西1.1km・南北1.2kmの新田遺跡のほぼ中央を東西方向に通る。平成10年度に京田辺市教育委員会は、調査地以南の田畑部の試掘調査を実施している。その結果、松井の丘陵裾部微高地上には、飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴式住居跡や掘立柱建物跡や溝跡などが確認されている。また、調査地南方からは埴輪片も確認されており、古墳の存在がうかがえた。また、平成4年度に西側の隣接地を調査した際に掘立柱建物跡（時期不明）を1棟検出しており、関連する遺構があるものと想定された。

調査概要 今回の調査は、道路予定地内の試掘調査であった。その結果、松井の丘陵裾部に広がる微高地は、調査地付近まで迫り出していた。しかし、一部の微高地は後世に水田面を作る際に削平を受けており、遺構面は確認できず、微高地斜面および低位地帯から、耕作溝や水田面を確認した。これら遺構面の上に瓦器碗を含む土が堆積しており、その頃の水田面と理解したい。

検出遺構は、東端のトレンチから水田面とその西隣に設定したトレンチで確認した溝10条のみである。溝はおよそ磁北方向を向き等間隔で見つかった。その規模は、確認長約20m・幅約0.4m・深さ約0.2mを測り、断面「U」字形を呈す。

まとめ 今回の調査で微高地部分は、後世に削平を受けていたことが判明し、わずかに認められた遺物包含層も二次堆積的なものと考えられた。微高地東側低位地帯より中世の耕作溝や水田面を検出したことは、当時、低位部が田畑として利用されていたことを示す。当遺跡は、京田辺市・八幡市にまたがる広大な遺跡である。数回にわたる調査から、八幡市側と京田辺市松井付近の高台から、住居跡などの遺構が認められている。今回の調査地は、その中間に当たり、顕著な遺構が認められなかったことから、遺跡の状況を再考する必要もあると考える。



(岡崎研一)

調査地位置図(1/50,000)

研究ノート

発掘調査によって検出された^{しきやくもん}四脚門の検討

—平安京跡右京一条三坊九町検出の四脚門について—

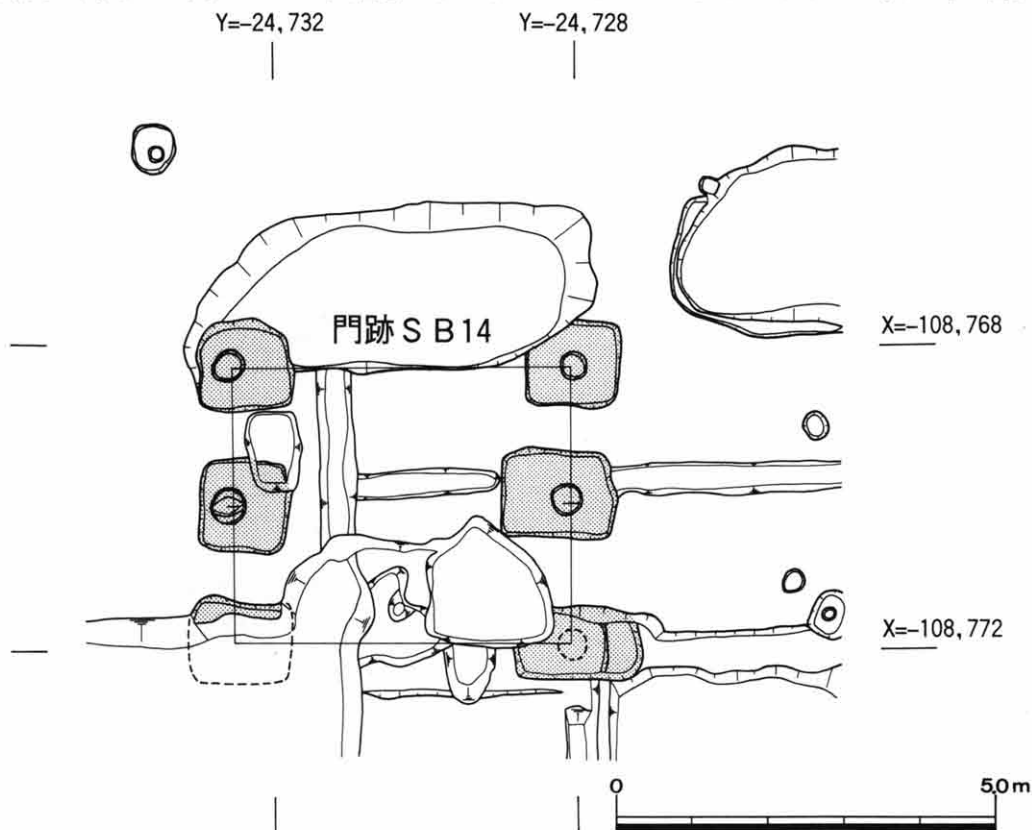
村田 和弘

1. 平安京跡右京一条三坊九町の調査

調査地である京都府立山城高等学校は、京都市北区大將軍坂田町29番地に所在する。延暦13(794)年に遷都した平安京の条坊区画では、右京一条三坊九・十町に相当する。

九・十町内である調査地では過去7次にわたり調査され、九町の敷地内に大規模な掘立柱建物を中心とした「コ」の字型の建物配置をもつ平安時代初期の邸宅遺構が検出されている。^(注1・2)

平成10・11年度(第8・9次)^(注3)の調査は、新校舎建設に先立ち建設予定地であるグラウンド内を約2,700㎡の面積で実施した。検出した遺構は、九町の条坊の南限の位置に築地の内側溝と考えられる東西溝(S D99010)や門跡(S B14)を検出した。また、九町と十町を区画する条坊道路である鷹司小路が想定される地点で道路側溝と思われる東西溝を検出した。しかし、築地や鷹司小路の路面が明確には残っておらず確定できるものではなかった。しかしながら、九町の南限で検



第1図 平安京跡右京一条三坊九町の四脚門

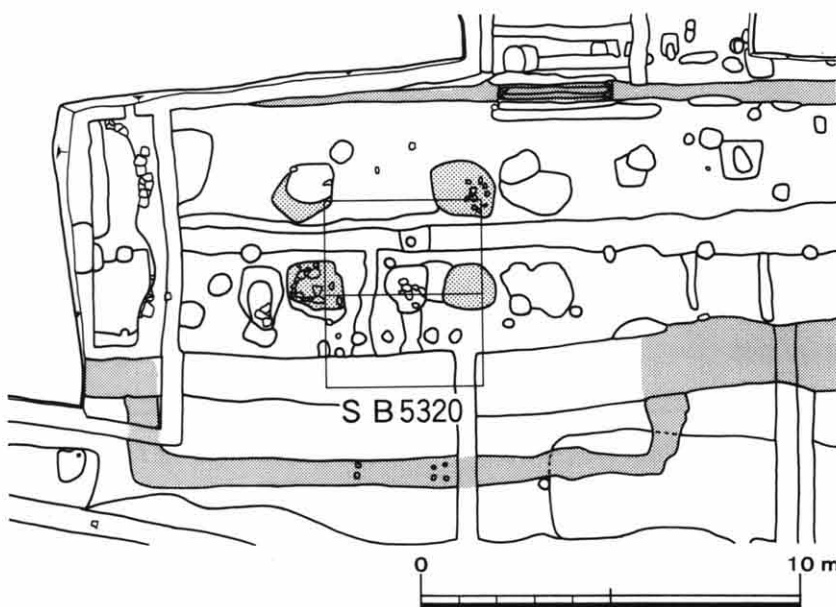
出した東西溝を築地の内側溝と考え、南限に門跡を検出したことなどから、邸宅の敷地が一町分であった可能性を示唆する新たな資料が得られたことになる。また、九町の南側にある十町の敷地内では、九町の邸宅と同時期の遺構は検出できなかったが、前後の時期の建物跡や井戸などの遺構を検出した。

2. 門跡 S B 14

九町で検出した門跡 S B 14は、桁行1間(約4.5m=15尺)、梁行2間(約3.6m=12尺)の規模である(第1図)。検出位置は、邸宅の中軸南延長線上にあり、九町(一町分)の南限にあたる。また、柱穴の規模が邸宅の中心建物と同一であることや切り合っている土坑 S K 99065と溝 S D 99070の出土遺物の時期などから、邸宅と同時期に存続していた南門であると考えられる。邸宅の存続時期は平安時代初期(8世紀末～9世紀初頭)にあたる。柱配置は、本柱2本と前後の控柱各2本の合計6本から構成される四脚門と考えられる。南側の控柱の柱穴2基は、後世の攪乱と溝 S D 99070の幅拡張によって破壊され、一部分のみ残存している状況であった。北西側の控柱にあたるの柱穴1の断面観察を実施した結果、柱掘形は一辺約1.3m、検出した面から底部まで約45cmを測る。柱の太さは平・断面から推定すると直径約35～40cmであろう。本柱は門全体の保存が決まったため調査はしていないが、平面からの柱穴規模は直径約45cmである。門は掘立柱の建築方法であり、柱の抜き取り穴もなかった。基礎部分に礎石を使用していないことなどの構造面から考えると、屋根に瓦が葺かれていた可能性は低く、檜皮葺きであったと推測する。

3. 発掘調査で検出された四脚門

奈良から平安時代の四脚門は、全国各地で数例検出されている(表1)。しかし、各地で検出さ



第2図 平城京検出の門跡
『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』より引用

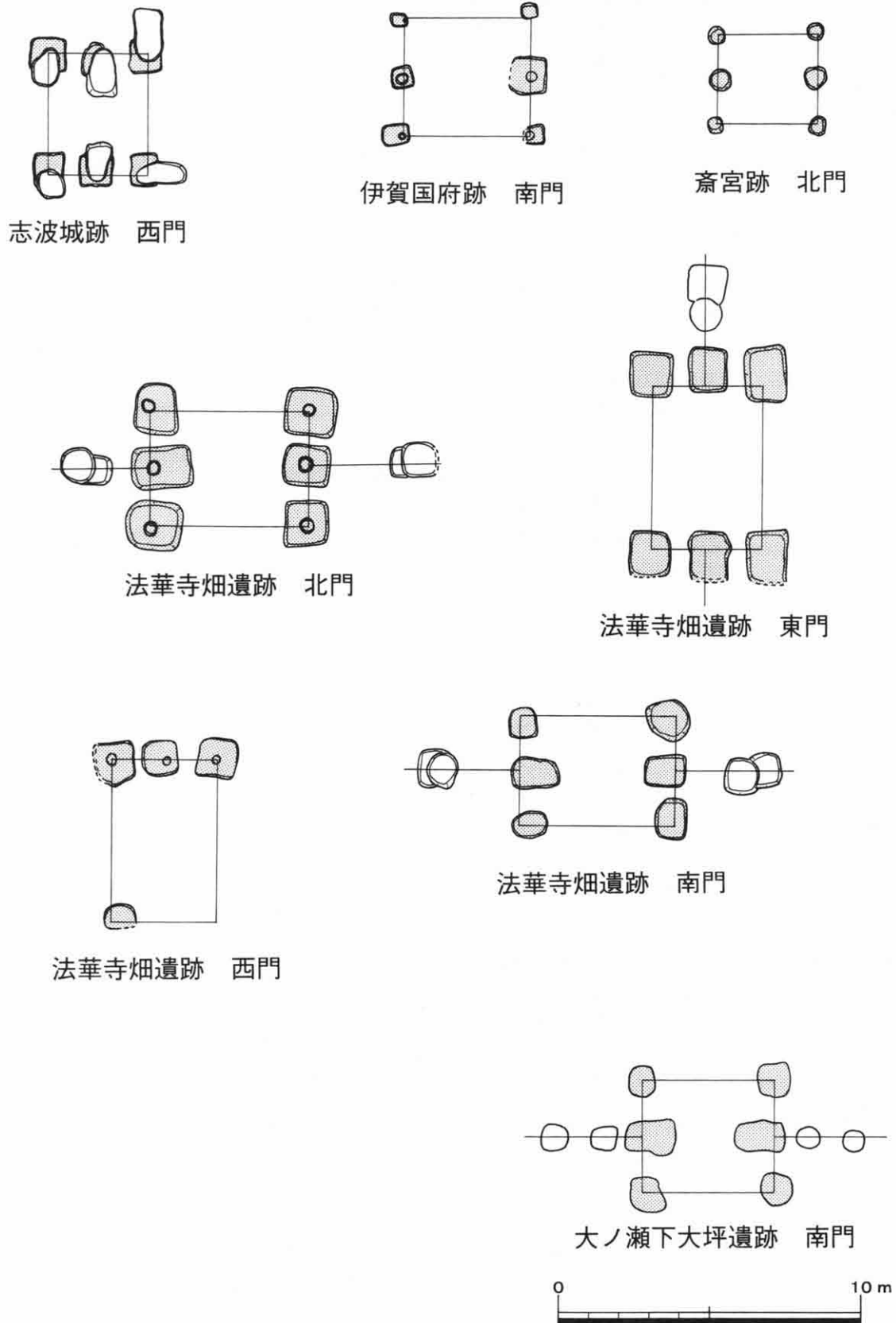
れている四脚門は、国府や国分寺などの公的な施設とされている遺跡のみである。

そのなかの平城京左京二条二坊・三条二坊(長屋王邸・藤原麻呂邸)の調査では、8世紀中頃の二条大路に面する南門を検出している(第2図)。しかし、報告書には「梁行が桁行より大きい事から、現存の古い四脚門で平面形式例を見いだせず、向

表1 四脚門検出例一覧表

	遺跡名	所在地	位置	構造	桁行	梁行	掘形	時期	備考
1	平安京跡右京一条三坊九・十町	京都府 京都市	南門	掘立	4.5m(15尺)	3.6m(12尺) 1.8mの等間	方形	9世紀 初頭	邸宅跡
2	志波城跡	岩手県 盛岡市	内城 西門	掘立	4.0m(13尺)	3.6m(12尺) 1.7mの等間	方形	9世紀	城柵
3	八森遺跡	山形県 八幡市	政庁 東門	掘立	2.9m(10尺)	3.7m(12尺) 1.5mの等間	方形	9世紀	出羽国衙 ?
4	能登国分寺	石川県 七尾市	南門	掘立	5.1m(17尺)	5.4m(18尺) 2.7mの等間	円形	10世紀 前半	国分寺
5	名生館官衙遺跡 (小館地区)	宮城県 古川市	政庁 南門	掘立	3.0m(10尺)	4.4m(15尺) 2.2mの等間	方形	8世紀	郡衙
6	十三宝塚遺跡	群馬県 境町	政庁 南門	掘立	4.8m(15尺)	4.5m(15尺) 2.25mの等間	方形	9世紀 初頭	郡衙か 寺院跡
7	下総国分尼寺	千葉県 市川市	中門	掘立	3.2m(11尺)	3.0m(10尺) 1.5mの等間	方形	8世紀 中頃	国分尼寺
8	伊賀国府跡	三重県 上野市	政庁 南門	掘立	4.5m(15尺)	3.9m(13尺) 1.95mの等間	方形	9世紀	国衙
9	斎宮跡 (斎宮小学校内)	三重県 明和町	官衙 北門?	掘立	3.4m(11尺)	3.0m(10尺) 1.5mの等間	円形	10世紀	官衙
10	平城京跡左京二条二坊・三条二坊 (長屋王邸・藤原麻呂邸)	奈良県 奈良市	南門 SB5320	礎石 ?	4.2m(14尺)	5.4m(18尺) 2.7mの等間	方形 ?	8世紀 中頃	邸宅跡 薬医門 または 棟門(庇)
11	法華寺畑遺跡 (伯耆国分尼寺)	鳥取県 倉吉市	南門 北門 東門 西門	掘立 掘立 掘立 掘立	5.2m(17尺) 5.4m(18尺) 5.4m(18尺) 5.4m(18尺)	3.6m(12尺) 3.6m(12尺) 3.6m(12尺) 3.6m(12尺) 1.8mの等間 1.8mの等間 1.8mの等間 1.8mの等間	方形 方形 方形 方形	8世紀 後半 8世紀 後半 8世紀 後半 8世紀 後半	国庁付属 官衙後に 国分尼寺
12	筑後国府跡 (風祭地区)	福岡県 久留米市	政庁 東門	掘立	4.0m(13尺)	2.6m(9尺) 1.3mの等間	方形	8世紀 前半	国衙
13	大ノ瀬下大坪遺跡 (豊前国上毛郡衙)	福岡県 新吉富村	政庁 南門	掘立	4.5m(15尺)	3.9m(13尺) 1.95mの等間	方形	8世紀 前半～9 世紀初	群衙 (推定)

唐門とする可能性が高い。しかし、奈良時代に向唐門が存在したとは考えにくい。また、四脚門とするなら門の南側の柱穴2基は溝によって破壊されているが、他の柱穴の規模から考えると一部でも残存しなければならないことから、薬医門か棟門に庇のついた門の可能性ある。」と指摘されている。今回調べた四脚門には、ほかにも梁行が桁行より大きい例がある。山形県八森遺跡・石川県能登国分寺・宮城県名生館官衙遺跡で検出された門跡が挙げられるが、門構造につい



第3図 各遺跡の四脚門検出例

表2 京都府重文指定四脚門一覧表

	名称	所在地	門名称	建立年代	屋根
1	教王護国寺	京都市南区	北総門	鎌倉前期	切妻造
2	教王護国寺	京都市南区	灌頂院東門	鎌倉前期	切妻造
3	教王護国寺	京都市南区	灌頂院北門	鎌倉前期	切妻造
4	建仁寺	京都市東山区	勅使門 (矢の根門)	鎌倉後期	切妻造
5	東福寺	京都市東山区	月下門 (月華門)	室町前期	切妻造
6	宝塔寺	京都市伏見区	総門	室町中期	切妻造
7	龍源院	京都市北区	表門	永正14 (1517)	切妻造
8	北野天満宮	京都市上京区	中門	慶長12 (1607)	入母屋造
9	北野天満宮	京都市上京区	東門	慶長12 (1607)	切妻造
10	妙心寺	京都市右京区	勅使門	慶長15 (1610)	切妻造
11	大徳寺	京都市北区	唐門	桃山	切妻造前後軒唐破風 付妻虹梁大瓶束唐
12	大徳寺	京都市北区	勅使門	慶長	切妻造
13	南禅寺	京都市左京区	勅使門	慶長	切妻造
14	豊国神社	京都市東山区	唐門	桃山	前後唐破風造 側面入母屋造
15	泉涌寺	京都市東山区	大門	桃山	切妻造
16	本願寺	京都市下京区	唐門	桃山	前後唐破風造 側面入母屋造
17	二条城・二の丸	京都市中京区	御殿唐門	慶長7・8 寛永2・3	切妻造
18	賀茂別雷神社	京都市北区	四脚中門	寛永5 (1628)	切妻造
19	賀茂御祖神社	京都市左京区	四脚中門	寛永5 (1628)	切妻造
20	正法寺	八幡市	唐門	寛永7 (1630)	
21	知恩院	京都市東山区	唐門	寛永18 (1641)	前後唐破風造 側面入母屋造
22	萬福寺・松隠堂	宇治市五ヶ庄	通玄門	寛文5 (1665)	切妻造

では「四脚門」と報告されている。表1を見ても分かるが門が建てられる場所(方角)には規制はないようである。

4. 九町の邸宅と門

九町の建物群は検出当時から貴族の邸宅と想定されている。また、中心建物は寝殿造の祖型との見解が出されている。^(注4)九町の邸宅の「コ」の字型の建物配置や脇殿の左右対称の建物配置は、宮内の内裏内郭や朝堂院の配置に酷似している。貴族の邸宅内において、前庭(未確認)をとめない左右対称の建物配置をとることは、内裏内郭や朝堂院の機能から考えると、邸宅の中でも公的な性格を持ったものと考えられる。一町分の敷地を占有していた貴族は三位以上

の高位高官であったと推定されることからも、位の高い貴族の邸宅であることがうかがえる。しかし、この貴族が自らの邸宅内でどのような行為を行っていたかは現時点では不明である。家政機関のようなものがあつた可能性も考えられる。今回検出した門跡S B104は、邸宅内に、おもに官衙などに採用される四脚門を持つことから考えると、邸宅内に公的な要素(または職務)をもつた貴族が居住していたと考えることもできる。

5. まとめにかえて

現存する京都府内の四脚門の例では、寺院や神社などの門が残っている(表2)。これらの四脚門は、すべて鎌倉時代以降の門とされている。これらの門跡は、時期こそは新しいが今後四脚門の構造を考えていく上で参考にしていかなければならない。今回、発掘調査で検出された四脚門

を挙げたが、ほとんどが官衙跡や寺院跡の門であった。平安京で検出した門跡S B 14のように邸宅跡から検出された例は少ない。この問題は、今後の検討課題と言える。もうひとつの課題は、平安京右京一条三坊九町の邸宅の南門に四脚門が採用された根拠についてである。邸宅の公的な要素を持つ建物配置と公的な施設に採用されていると考えられる四脚門の採用理由についても、考えていかなければいけない。これらは今後の九町の邸宅の多くの謎の解明にかかわるものではないだろうか。邸宅の主は誰なのか、まだまだ謎は多く、やっと邸宅の正門(南門)をくぐったところである。

(むらた・かずひろ＝調査第2課調査第1係調査員)

- 注1 平良泰久・石井清司・常盤井智行「平安京跡(右京一条三坊九町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-3 京都府教育委員会) 1980
平良泰久・伊野近富・常盤井智行・杉本 宏・谷口智樹・村川俊明「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-1 京都府教育委員会) 1981
- 注2 山口 博「平安京跡右京一条三坊九町 昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
石井清司「平安京跡右京一条三坊九町(第7次)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注3 村田和弘「平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注4 注1に同じ。
- 注5 注1に同じ。

参考文献

- 盛岡市教育委員会『志波城跡－昭和58年度発掘調査概報』 1984
八幡町教育委員会『八森遺跡－第8・9・10次発掘調査報告』 1989
『史跡能登国分寺跡－第9次・展示館建設地発掘調査報告書』 1991
古川市教育委員会『名生館官衙遺跡』Ⅶ～ⅩⅤ 1987～1995
群馬県教育委員会『十三宝塚遺跡発掘調査概報Ⅱ』 1976
市立市川考古博物館『下総国分寺－いま見つめなおす下総の天平文化』 1995
泉 雄二「伊賀国」(『国府－畿内・七道の様相－ 日本考古学協会三重県実行委員会) 1996
明和町教育委員会『史跡齋宮跡－齋宮小学校内発掘調査報告』 1985
奈良県教育委員会『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』 1995
倉吉市教育委員会『伯耆国分寺・国分尼寺の発掘調査』 1972
倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺跡発掘調査概報』 1973
久留米市教育委員会『筑後国庁跡－昭和54年発掘調査概報』 1980
新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第10集) 1997
第27回山陰考古学研究集会『遺跡を活かす』 1999
山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房 1994
『京都・山城 寺院神社大事典』 平凡社 1997

府内遺跡紹介

87. 大枝山古墳群

遺跡の概要 京都市の西郊、嵯峨野から洛西にかけては、横穴式石室を主体部とする群集墳が広がっており、竹林の広がる静かな里山であった。しかし、現在では新興住宅地の造成によってそのほとんどが破壊され、往時の景観は失われてしまったが、桂坂ニュータウンの中に時間に残り残されたように古墳公園が残っている。ここで紹介する大枝山古墳群は、「塚原」や「唐櫃越」の地名とともに古くから知られ、保存状態の良い古墳群として著名である。すでに、大正年間に『人類学雑誌』に梅原末治氏によって10基の古墳が報告されたが、1971年に京都大学考古学研究会によって新たに踏査が行われ、25基の古墳の存在が明らかとなった。その後、(財)京都市埋蔵文化財研究所によって9基の発掘調査が実施され、古墳群の詳細な年代と築造方法が判明した。発掘調査された古墳はすべて横穴式石室であり、盗掘が著しい古墳も見られたが、遺物が良好に遺存する古墳も見られた。その結果、古墳群は6世紀後半を中心として造営され、その造営主体は殖産豪族と呼ばれた秦氏がその候補に上がっている。

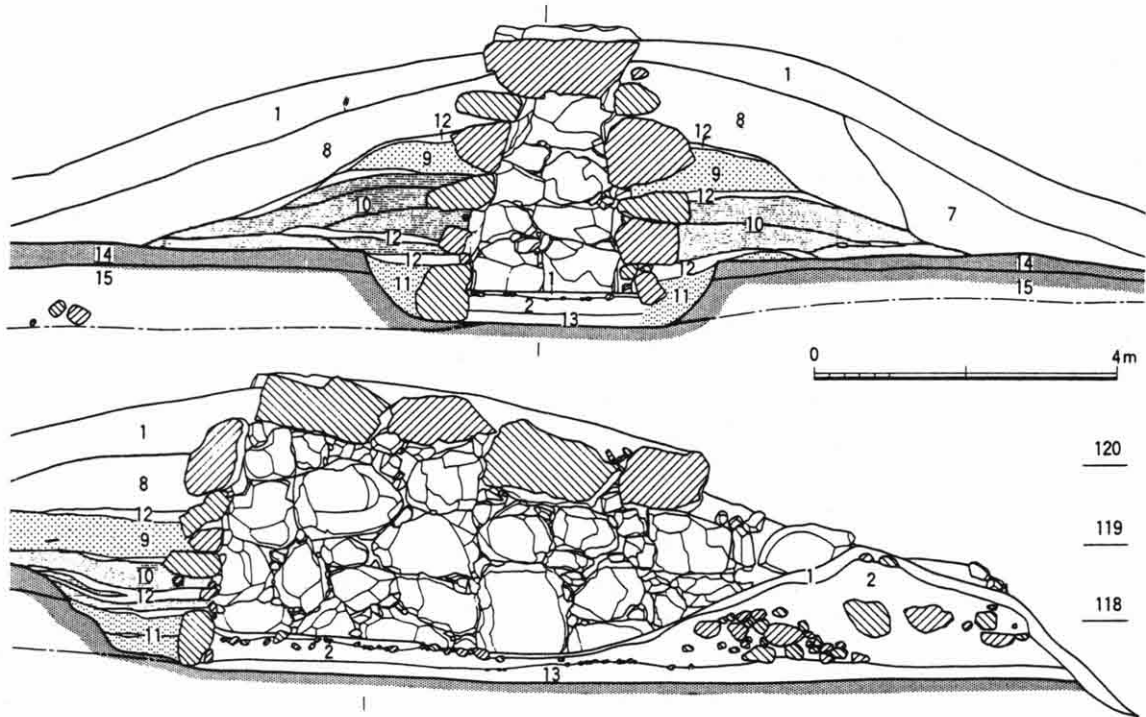
遺跡の意義 横穴式石室に入った経験のある人は誰しも、石室内側の石積みに圧倒されるが、その石材がどのようにして積まれたのかは古墳の封土を除去して、石室を解体するように調査しなければ、分からない。飛鳥の石舞台古墳が人をひきつけてやまないのは、その巨大さもさることながら、めったに見ることのできない石室外観を目の当たりにできるからである。また、京都府内でも京都市右京区蛇塚古墳を見学したことのある人もあろう。発掘調査では、石積みと盛土がどのような手順で積まれているかを記録していくことで、古墳の築造方法の解明につながる。とはいいつつも、実際に横穴式石室を持つ古墳を解体した調査例は多くはない。近年、石川県須曾蝦夷穴古墳や京都府物集女車塚古墳など、崩壊しつつある石室を補強・復原する一環として、



第1図 遺跡の位置

石室の解体調査が実施され、墳丘盛土・石材に対する物性分析が実施されている。横穴式石室が考古学にとどまらず、土木工学的な分析対象として捉えられるようになったのである。

大枝山古墳群の場合はどうか。この古墳群の築造方法は、3段階にモデル化されている。第1段階は、墓域の決定から始まって地山面を平坦化する造成工事と周溝および石室掘形の掘削までである。第2段階は墳丘・石室の構築を始めて、全体を整備する段階である。そして第3段階が古墳の築造が終了し、死者を埋葬する段階である。また、



第2図 大枝山古墳群の石室(4号墳・土色名は省略)

墳丘の基底面では薄い炭層が広がっており、古墳の築造に先だって「山焼き」をしたらしいこともうかがえる。また、石室は4段、封土は5層を順次盛り上げて築造したことも判明した。大枝山古墳群ではないが、大阪府蔵塚古墳では、この封土の盛り上げに、土嚢が使用されたことが判明しており、山口県岩谷古墳では、先に石室を覆うように小さな墳丘を造り、しばらくの休止期間において、その外側に墳丘を拡張するという工法がとられている。いずれにせよ、横穴式石室の調査では、石室そのものの分析以上に、それをどのように築いたかが発掘調査では重要であり、多様な古墳築造の方法が徐々に判明してきた。

今までの文章は、古墳がどのように築かれたかを述べてきた。これとは逆に、古墳がどのように壊れるかの研究もある。これは石室の経年変化を測定することであり、北部九州の装飾古墳では完全密閉して、嚴重に監視体制を敷くところもある。しかし、短期間では結果が出にくいし、変化が生じた後で修復不能となつては本末転倒である。そこで石室のデジタル3Dモデルをつくり、土圧を加味することで石室形態の変化の予測を行う研究がある。これは、対象となる石室が板石構成のものであり、栗石を積んだ複雑な構造の石室にも適用することができるかは今後の課題だが、石室の築き方、壊れ方双方の研究が進むことは面白い。その作業を通して、古墳時代人の土木技術の水準を私たちは評価できるのである。

遺跡の案内 京都市バス「センター前」下車。徒歩10分。

参考文献

京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代 御堂ヶ池群集墳発掘調査報告』 1971

(財)京都市埋蔵文化財研究所『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊 1989

長岡京跡調査だより・72

前回の『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成11年11月24日・12月21日・平成12年1月26日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内2件、左京域9件、右京域13件であった。京外の6件を併せると30件となる。

調査地一覧表(2000年1月末現在)

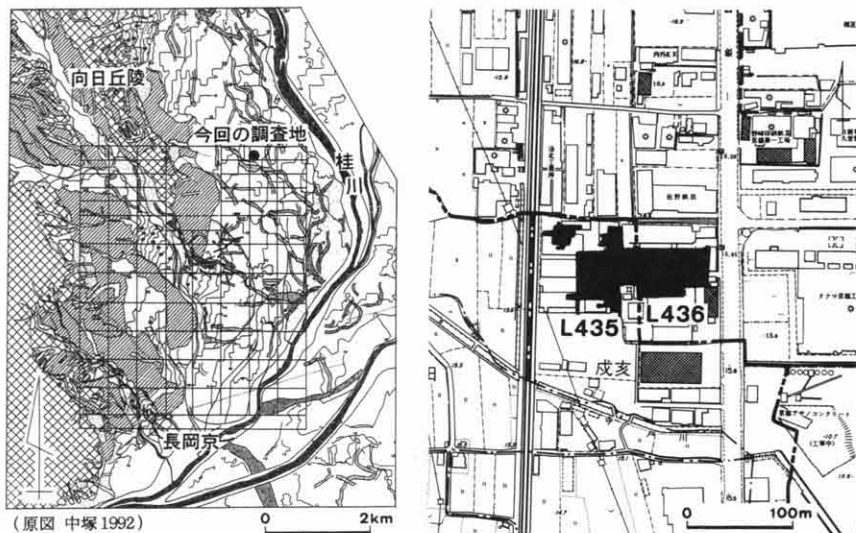
番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第384次	7ANFMK-15	向日市鶏冠井町祓所36-1-9.39-1-2	(財)向日市埋文	12/20~2/29
2	宮内第385次	7ANCHM-3	向日市南山56-2	(財)向日市埋文	1/18~
3	左京第426次	7ANVKC-2	京都市南区久世東土川町178他	(財)京都市埋文研	9/20~11/15
4	左京第433次	7ANFSK-4	向日市上植野町尻引1-3 柳ヶ町19-4.19-5	(財)向日市埋文	8/3~1/31
5	左京第434次	7ANVHR-3	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文	9/16~
6	左京第435次	7ANDII-7	向日市森本町戌亥11.17-3.17-4	(財)向日市埋文	9/16~3/下
7	左京第436次		京都市久世殿城町338	(財)古代学協会・ 古代学研究所	9/27~00.3/10
8	左京第437次	7ANFGB-4	向日市上植野町五ノ坪11-1・ 2.12-1・2	(財)向日市埋文	10/6~12/27
9	左京第438次	7ANFMI-7	向日市上植野町南淀井2	(財)向日市埋文	11/16~12/27
10	左京第439次	7ANEKZ-5	向日市鶏冠井町草田33	(財)向日市埋文	11/16~12/6
11	左京第440次	7ANEKZ-5	向日市森本町高田28-1・3.29-3	(財)向日市埋文	12/13~1/31
12	右京第638次	7ANMHK-2	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/24~00.1/17
13	右京第650次	7ANINC-10	長岡京市今里五丁目327-2他	(財)長岡京市埋文	8/17~12/1
14	右京第653次	7ANIAE-12	長岡京市今里四丁目210	(財)長岡京市埋文	10/4~11/26
15	右京第654次	7ANMDB-3	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	10/25~00.3/31
16	右京第656次	7ANMQSE-4	長岡京市久貝117-1他	(財)長岡京市埋文	10/12~11/15
17	右京第657次	7ANIOK-4	長岡京市天神5丁目106	(財)長岡京市埋文	11/1~12/28
18	右京第658次	7ANLKR-4	長岡京市馬場二丁目8-7他	(財)長岡京市埋文	12/6~12/10
19	右京第659次	7ANQUT-1	長岡京市久貝10-4・5	(財)長岡京市埋文	12/3~12/15
20	右京第660次	7ANKSN-9	長岡京市長岡一丁目441番地の 一部	(財)長岡京市埋文	12/7~12/15
21	右京第661次	7ANNM-2	長岡京市友岡西山14-7他	(財)長岡京市埋文	1/6~2/5
22	右京第662次	7ANNM-3	長岡京市友岡西山14-7他	(財)長岡京市埋文	1/6~1/25
23	右京第663次	7ANIOK-5	長岡京市天神5丁目地内	(財)長岡京市埋文	1/11~3/24
24	右京第664次	7ANMHK-4	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/24~00.1/17
25	中海道遺跡第 50次	3NNANK-50	向日市物集女池ノ裏18-1	(財)向日市埋文	12/15~12/27

26	笹屋遺跡第6次	7ASBKO-2	向日市寺戸町小佃10-5	(財)向日市埋文	12/15～12/17
27	向日市立会99115	7AMAMO	向日市物集女町豆尾36-1	(財)向日市埋文	12/10
28	下植野南遺跡	IK-31地区	大山崎町下植野門田地内	(財)京都府埋文	4/12～00.1/28
29	大藪遺跡		京都市南区久世殿城町	(財)京都市埋文研	7/6～00.3/31
30	中久世遺跡		京都市南区久世中久世町4-37	(財)京都市埋文研	7/21～8/2

長岡京左京北一条三坊二町・三町の発掘調査(現地説明会資料より)

(財)古代学協会・古代学研究所と(財)向日市埋蔵文化財センターは、京都市南区久世殿城町・向日市森本町戊亥で、発掘調査を実施し、長岡京で最大規模の離宮遺構を確認した。調査地は、長岡京の北東部に当たり、京域の北端に位置する。ここでは、大型の掘立柱建物跡と礎石建物跡・遣り水状の遺構・井戸が検出され、各施設が順次造られていったことが判明した。また、建物配置上の特徴は、中心部分が内郭構造を取り、入母屋ないしは寄棟であったと考えられ、一方で、外郭部の建物群は切妻であり、きわめて対照的な景観をなしていたと想像される。建物の多くは、長岡京では2例目の検出となる足場穴を伴い、梁行・桁行きともに10尺等間を基本とし、計画的に配置されている。また、その内の2棟は、長岡京では前例を見ない礎石・掘立柱併用建物と推定される。おもな出土遺物には「勅旨所」の注文瓦と見られる「旨」字刻印瓦をはじめとする瓦類、溝に投棄された炭化材、土師器椀・皿類などの食膳具などが多量に出土し、何らかの儀式か宴に使用されたと考えられる。また、条坊区画施設を壊して建物群を拡張・造営しており、今回の調査で発見された遺構群は、6町以上の広さをもつ桓武天皇の離宮の一つと考えられる。

(河野一隆)



調査地の位置(現地説明会資料より)

センターの動向(1999.11~2000.1)

1. できごと

- | | |
|--|--|
| <p>11.8~9 京都府一般職員研修Ⅱ、石崎善久調査員出席</p> <p>8~13 全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修「韓国」鍋田幸世主事参加</p> <p>8 平山1~3号墳(園部町)発掘調査開始</p> <p>10 新田遺跡(京田辺市)発掘調査開始</p> <p>11 長岡京大極殿祭(於：向日市)、平良泰久調査第2課長出席</p> <p>12 佐山尼垣外遺跡(久御山町)関係者説明会
市田齊当坊遺跡(久御山町)試掘調査終了(10.25~)</p> <p>15 職員研修(於：当センター)、講師：福嶋利範事務局次長「人権」人権研修会(於：京都市)、久保哲正調査第2課主幹出席</p> <p>16 新田遺跡(京田辺市)試掘調査開始</p> <p>17 埋蔵文化財保護行政担当者会議(於：京都市)、奥村清一郎調査第2課課長補佐、伊野近富企画係長出席</p> <p>18 春日神社遺跡(精華町)発掘調査開始</p> <p>19~26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修「中国」筒井崇史調査員参加</p> <p>19 埋蔵文化財調査支援機器の開発に関する研究会(於：大阪市)、平良泰久調査第2課長出席</p> <p>24 長岡京連絡協議会</p> <p>25 木村英男常務理事・事務局長、太田遺跡現地視察
国土地理院主催測量技術講習会</p> | <p>(於：大阪市)、岩松 保主任調査員出席</p> <p>26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：京都市)、木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、安田正人総務課主幹、杉江昌乃主任、今村正寿、西林紀子、岡田正記各主事出席</p> <p>29 中澤圭二副理事長、下植野南遺跡現地視察
杉北遺跡(亀岡市)発掘調査開始</p> <p>12.1 内田山遺跡・内田山B1号墳現地説明会
藤井 学理事、佐山遺跡(久御山町)現地視察</p> <p>1~2 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京都)、木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、安田正人総務課主幹出席</p> <p>6 森垣外遺跡(精華町)第4次調査現地説明会</p> <p>7 市田齊当坊遺跡発掘調査開始</p> <p>8~21 奈良国立文化財研究所専門研修「官衙遺跡調査課程」伊賀高弘調査員参加</p> <p>9 上田正昭理事、太田遺跡(亀岡市)現地視察</p> <p>10 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡(宇治市)発掘調査開始
太田遺跡現地説明会
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：京都市)、小山雅人調査第1課長、河野一隆調査員出席</p> <p>13 出土文化財整理・台帳作成事業</p> |
|--|--|

- | | |
|---|---|
| <p>(緊急地域雇用特別交付金対象事業)開始</p> <p>14 杉北遺跡、発掘調査終了(11.29～)</p> <p>15 河原遺跡(城陽市)試掘調査開始</p> <p>16 春日神社遺跡、発掘調査終了(11.18～)</p> <p>17 職員研修(於：当センター)、講師：岩松 保主任調査員「市田斉当坊遺跡の検討」</p> <p>20 内田山遺跡・内田山古墳(木津町)試掘調査終了(9.1～)</p> <p>21 長岡京連絡協議会</p> <p>22 第57回役員会・理事会(於：京都市)</p> <p>1. 6 柿添遺跡(精華町)発掘調査開始</p> <p>13 教育関係法人職員合同研修会(於：京都府庁西別館)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、平良泰久調査第2課長、安田正人総務課主幹、久保哲正調査第2課主幹出席</p> | <p>14 佐山遺跡(久御山町)発掘調査終了(9.8～)</p> <p>森垣外遺跡発掘調査終了(5.10～)</p> <p>18 荒坂遺跡(八幡市)試掘調査開始</p> <p>24 大島遺跡(木津町)発掘調査開始</p> <p>26 今林6～8号墳(園部町)試掘調査開始</p> <p>荒坂横穴群(京田辺市)試掘調査開始</p> <p>長岡京連絡協議会(於：当センター)</p> <p>28 下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査終了(4.12～)</p> <p>新田遺跡(京田辺市)試掘調査終了(11.16～)</p> |
|---|---|

コラム～熱気を帯びてきた都城の調査～

本『情報』の編集作業中に、奈良県明日香村酒船石遺跡で、精巧な亀形石造物や石段・溝などを備えた両槻宮の一部かと推定される遺構が検出された。各マスコミは、こぞって一面トップでこの大発見を伝え、飛鳥の都が大きくクローズアップされることになった。その一月ほど前、「長岡京調査だより」でも簡単にふれた長岡京左京北一条三坊二・三町の桓武天皇の離宮跡の現地説明会が実施され、1000人を越える熱心な参加者が集まった。発掘現場で検出された大きな柱穴掘形は、内裏正殿に匹敵すると言われる巨大な建物を想像させるに十分で、まさに専制君主・桓武天皇のイメージにぴったりであった。

思えば、今、京都および周辺の考古学で最もホットな話題は、都城ではないか。今年度を振り返ってみても、長岡京関係では、長岡京市神足で、兵舎あるいは京造営キャンプかと推測される建物跡群が検出されたし、大山崎町では山城国府関係の調査で注目すべき成果が上がっている。京都府教育委員会が昭和48年から継続的に発掘調査を実施してきた恭仁宮跡では、山城国分寺の時期の礎石建物が見つかり、恭仁宮およびその後の山城国分寺関連遺構の実態がかなり把握されるようになった。また、大阪府では難波宮で孝徳朝の紀年銘木簡が出土し、「大化改新論」との関連で大きな話題を提供したことも、記憶に新しい。

それにつけても疑問に思うのは、長岡京を「未完成の都」とするマスコミ報道である。京の造営を司った藤原種継の暗殺事件のイメージがあっただけか、長岡京の完成度について過小評価しすぎるきらいがあるように思われる。しかし、中山修一氏によって先鞭を付けられ、蓄積された乙訓地域での埋蔵文化財の調査成果や山中 章氏の条坊制研究、文献史学との共同研究によって、この評価は確実に覆されつつある。長岡京が「幻の都」ではないと教科書に書かれる日が来るのも時間の問題ではなからうか。

(河野一隆)

受贈図書一覧(11.11~12.1)

(財)福島市振興公社文化財調査室

福島市埋蔵文化財調査報告書第83集 稲荷塚古墳、同第84集 暮坪湯ノ上遺跡、同第85集 浜井場遺跡、同第86集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要V、同第87集 平成7年度遺跡詳細分布調査報告、同第88集 勝口前畑遺跡4、同第89集 一本松遺跡・菅原遺跡・高畑遺跡・古屋敷東遺跡、同第90集 鎌田館跡、同第91集 宮畑遺跡、同第92集 勝口前畑遺跡5、同第93集 西根下堰跡、同第94集 山ノ下遺跡2、同第96集 平成8年度遺跡詳細分布調査、同第97集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告5、同第98集 麦地石遺跡2、同第99集 勝口前畑遺跡7、同第100集 勝口前畑遺跡8、同第101集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要VI、同第102集 大平・後関遺跡2、同第103集 中谷地B遺跡・台畑遺跡、同第104集 上ノ平遺跡・上ノ平古墳群、同第105集 菅原遺跡・高畑遺跡、同第106集 浜井場遺跡2、同第107集 台畑遺跡2、同第108集 山ノ下遺跡3、同第109集 宮畑遺跡2、同第110集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告6、同第111集 岸寮跡、同第112集 宮代館跡、同第113集 勝口前畑遺跡9、同第114集 城裏口遺跡、同第115集 西B・C遺跡、同第116集 菅原遺跡、同第117集 八幡塚古墳、同第118集 浜井場遺跡、同第119集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要VII、同第120集 平成9年度遺跡詳細分布調査報告、同第121集 山ノ下遺跡4、同第122集 月崎A遺跡、同第123集 権ノ守遺跡、同第124集 岡ノ内遺跡・東土入遺跡、同第125集 平成10年度遺跡詳細分布調査報告、同第126集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告7、同第127集 番匠内遺跡、同第128集 西原廃寺跡2、同第129集 摺上川ダム関連埋蔵文化財発掘調査概要VIII、同第130集 上岡遺跡・増田条里制遺跡

(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

研究紀要第7号、年報第9号、栃木県埋蔵文化財調査報告第222集 多功南原遺跡、同第224集 寺野東遺跡II、同第225集 伊勢崎II遺跡、同第229集 東谷・中島地区遺跡群No.1、同第230集 一本松遺跡・文殊山遺跡、同第232集 上三王遺跡

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要17、年報18、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第190集 安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡、同第256集 小八木志志貝戸遺跡群、最新情報展1999

埼玉県立埋蔵文化財センター

年報9

(財)千葉県文化財センター

研究紀要19、研究連絡誌第53、54号、今古代史がおもしろい

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第50集 多摩ニュータウン遺跡、同第75集 多摩ニュータウン遺跡、同第76集 多摩ニュータウン遺跡

(財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告62 堂地谷やぐら群、同70 福泉遺跡所在やぐら群、同71 長勝寺跡所在やぐら群、同72 極楽寺やぐら群、同73 一升榊遺跡所在やぐら群、同74 鎌倉城所在やぐら群、同82 新宮台横穴墓、同83 松輪坪井横穴墓群、年報6

(財)山梨文化財研究所

遺跡・遺物から何を讀みとるか(III)

富山県埋蔵文化財センター

下村加茂遺跡、下村加茂遺跡発掘調査報告

(財)岐阜市教育文化振興事業団

(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第3集 城之内遺跡、平成9・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書、城之内遺跡

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

列島に広がる大窯製品

(財)大阪府文化財調査研究センター

大阪府立弥生文化博物館平成12年冬季企画展 大阪2000

高槻市立埋蔵文化財調査センター

邪馬台国と安満宮山古墳

奈良市埋蔵文化財調査センター

奈良市埋蔵文化財調査研究報告第2冊 史跡平城京朱雀大路跡、奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度、紀要1997、同1998、平城京東市跡推定地の調査XVI

鳥取市埋蔵文化財調査センター

史跡鳥取城附太閤ヶ平中ノ御門発掘調査報告書、平成10年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書、古市遺跡II、防己尾城跡・岩本第2遺跡

島根県埋蔵文化財調査センター

宍道・女夫岩遺跡

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第266集 高岩(1)遺跡・高岩(2)遺跡・白蛇(1)遺跡・鳥河岸遺跡、同第267集 青森県遺跡詳細分布調査報告書XI、同第268集 十三湊遺跡IV

鶴岡市教育委員会

鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第9集 市内遺跡分布調査報告書

目黒区教育委員会

油面遺跡

大田区教育委員会

環8光明寺地区遺跡調査報告書Ⅰ、同Ⅱ

伊那市教育委員会

信濃の牧・春近領・宿場

飯田市教育委員会

恒川遺跡群薬師垣外遺跡・宮垣外遺跡他市内遺跡、稲荷坂遺跡、水城遺跡、寺所遺跡、座光寺中島遺跡、三尋石遺跡Ⅲ、新井原・石行遺跡、黒田大明神原遺跡Ⅱ、大門原遺跡

三条市教育委員会

三条市文化財報告書第10号 内野手遺跡・経塚山遺跡

小矢部市教育委員会

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第41冊 平成6年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報同第42冊 白谷岡村遺跡、NEWS-WIDE VOL. 1

掛川市教育委員会

近世の掛川、大谷古墳群、向山遺跡発掘調査報告の記録、曾我後遺跡発掘調査報告書、松葉城址確認調査報告書、安養寺Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書、地藏堂遺跡発掘調査報告書、岡津原Ⅲ遺跡発掘調査報告書

四日市市教育委員会

四日市市遺跡調査会文化財調査報告書ⅩⅡ 東起古墳、四日市市文化財保護年報9、一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財調査概報Ⅲ、四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書21 茶臼山1号墳、同22 菖蒲谷遺跡、同23 公事出遺跡遺跡

長浜市教育委員会

長浜市埋蔵文化財調査資料第24集 川崎南遺跡、同第26集 野瀬遺跡発掘調査報告書

中主町教育委員会

中主町文化財調査報告書第52集 平成8年度中主町内遺跡発掘調査年報、同第53集 平9年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ、同第55集 平成9年度中主町内遺跡発掘調査年報

大阪府教育委員会

池上曾根遺跡、土師の里遺跡、摩湯山古墳Ⅱ、谷川遺跡、美園遺跡、土師の里遺跡他発掘調査概要Ⅲ、田井中遺跡発掘調査概要Ⅵ、同Ⅷ、三軒屋遺跡発掘調査概要Ⅱ、木の本遺跡発掘調査概要Ⅲ、新堂遺跡発掘調査概要Ⅲ、大水川改修にともなう発掘調査概要Ⅹ、岸之本南遺跡発掘調査概要、余部遺跡(その1)発掘調査概要Ⅱ、余部遺跡(その2)発掘調査概要Ⅱ、陶邑窯跡群発掘調査概要Ⅱ、陶器南遺跡発掘調査概要Ⅴ、同Ⅵ、男里遺跡発掘調査概要Ⅳ、雁屋遺跡発掘調査概要Ⅲ、倉垣遺跡(E地区)発掘調査概要、土丸遺跡発掘調査概要、諸目遺跡他発掘調査概要、亀井遺跡、大阪誕生 古墳時代、大阪府指定文化財一覧 平成10年度、年報2、文化財の府指定平成9年度、同平成10年度

大阪市教育委員会

大阪の歴史と文化財 第4号

岸和田市教育委員会

岸和田市文化財発掘調査報告書7 津田北遺跡

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム、兵庫県文化財調査報告第185輯 北摂ニュータウン内遺跡調査報告書N、平成10年度年報

氷上郡教育委員会

氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅱ、常勝寺・鬼こそ

中町教育委員会

中町文化財報告19 糶屋・里の垣内遺跡、同20 東山古墳群Ⅰ

御所市教育委員会

御所市文化財調査報告書第24集 室宮山古墳出土遺物

田原本町教育委員会

田原本町埋蔵文化財調査年報7、同8

和歌山市教育委員会

和歌山市内遺跡発掘調査概報平成9年度、太田・黒田遺跡第43次、山口遺跡第6次

玉湯町教育委員会

蛇喰遺跡

高松市教育委員会

高松市埋蔵文化財調査報告第37集 讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ、同第38集 川南・西遺跡、同第39集 キモンドー遺跡、同第43集 筑城城跡

津島町教育委員会

津島町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 犬除遺跡

三瀨町教育委員会

玉満松木ソノ遺跡 三瀨町文化財調査報告書第6集

千代田町教育委員会

千代田町文化財調査報告書第22集 直鳥遺跡、同第23集 詫田西分遺跡、同第24集 詫田西分遺跡、同第25集 詫田西分遺跡

日田市教育委員会

吹上遺跡、有田塚ヶ原遺跡群、平成9年度(1997年度)日田市埋蔵文化財年報

人吉市教育委員会

人吉市文化財調査報告第18集 史跡人吉城跡Ⅸ、同第19集 史跡人吉城跡Ⅹ、地下室遺構の発掘調査報告書

玉里村史資料館

館報第4号、館山遺跡発掘調査報告書、地方王権の時代

栃木県立なす風土記の丘資料館

年報第7号

国立歴史民俗博物館

研究報告第79集、研究年報7

千葉市立加曽利貝塚博物館

長崎県の貝塚と遺跡

世田谷区立郷土資料館

これは何でしょう ぱあと3、畿内王権と古代の東国

新宿区立新宿歴史博物館

市谷薬王寺町遺跡Ⅱ、尾張徳川家下屋敷跡Ⅲ

- 調布市郷土博物館
調布の職人たち
- 松本市立考古博物館
松本市文化財調査報告No.138 平田本郷遺跡Ⅲ
- 富山市考古資料館
紀要 第19号
- 出光美術館
研究紀要第5号、館報第108号
- 岐阜県博物館
館報第22号、調査研究報告第20号、水とまつり
- 浜松市博物館
館報第12号、近代の織物
- 名古屋博物館
年報 No.22
- 名古屋市見晴台考古資料館
高蔵遺跡第19次発掘調査報告書、正木町遺跡第10次発掘調査報告書、東二葉町遺跡第2次発掘調査報告書
- 斎宮歴史博物館
館蔵品資料目録、斎宮女御、平成10年度年報、史跡斎宮跡 平成9年度発掘調査概報
- 滋賀県立安土城考古博物館
さざなみの志賀
- 東大阪市立郷土博物館
渡来人とのであい
- 八尾市立歴史民俗資料館
古文書からみた江戸時代の久宝寺村
- 明石市立文化博物館
明石市文化財年報 平成8年度
- 九州歴史資料館
研究論集24、年報(平成10年度)、大宰府史跡 平成10年度発掘調査概報
- 伊都歴史資料館
怡土城とその時代
- 佐賀県立名護屋城博物館
年報No.5、研究紀要第5集
- 佐賀県立博物館・美術館
調査研究書第23集
- 国立中央博物館
ガラス乾板目録集Ⅲ
- 青山学院大学史学研究室
青山史学 第17号
- 東京女子大学読史会
史論第52集
- 玉川大学教育博物館
聖山横穴墓群発掘調査報告書
- 日本女子大学史学研究会
史艸 第40号
- 明治大学博物館事務室
年報1998年度
- 東京都立大学人文学部考古学研究室
人類誌集報1999
- 滋賀県立大学人間文化学部
人間文化第7号
- 滋賀大学教育学部考古学研究室
滋賀史学会誌第11号
- 神戸女子大学史学会
神女大史学 第16号
- 天理大学附属天理参考館
館報第12号
- 奈良大学文学部考古学研究室
奈良大学考古学研究室調査報告書第16集 武貝塚発掘調査研究報告書、同第17集 秋篠・山陵遺跡、氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(5)
- 広島大学環境保全委員会
広島大学総合移転地埋蔵文化財発掘調査年報XV
- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
年報13
- 山武考古学研究所
熊野遺跡、上人塚遺跡、恋越遺跡、三ノ倉落合遺跡、北山遺跡発掘調査報告書、京塚遺跡、城の内遺跡、中峯古墳、内野B遺跡、浜ノ原遺跡、寄居B遺跡、奴郷2遺跡、高田城址、干俣前田I遺跡・干俣前田II遺跡、八木連西久保遺跡・行沢大竹遺跡・行沢竹松遺跡・諸戸スサキ遺跡、上三川町埋蔵文化財調査報告第20集 五分一上野原遺跡
- (財)韓国文化研究振興財団
青丘学術論集 第15集
- 日野新町一丁目住宅遺跡調査会
姥久保遺跡Ⅱ
- 朝日新聞社出版局
考古学クロニクル2000
- (株)ニュートンプレス
NEWTONアーキオ VOL12 大ローマ帝国
- 浜松市埋蔵文化財調査事務所
下滝遺跡群2、半田山古墳群1999
- (財)古代学協会
古代文化 第51巻第10~12号、仁和寺研究 第1輯
- 関西文化財調査会
淳和院跡発掘調査報告、平安京左京五条三坊発掘調査報告
- (株)阿吽社
聚楽第・梅雨の井物語
- 妙見山麓遺跡調査会
神楽遺跡、兵庫鉦業史の研究Ⅰ、神楽遺跡、播磨産銅史の研究
- 津名郡町村会
津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ
- 養父郡広域事務組合
関宮町埋蔵文化財調査報告7 鉢伏高原遺跡
- 朝鮮学会
朝鮮学報 第172輯
- シルクロード学術研究センター
中央アジアのイスラーム陶器と中国磁器
- 奈良国立文化財研究所
飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(14)、官営工房研究会誌6、年報1999-I~III

木簡学会

木簡研究 第21号

古代の土器研究会

飛鳥・白鳳の瓦と土器

御坊市遺跡調査会

中村地区遺跡発掘調査報告書、日高郡衙跡

岡山県古代吉備文化財センター

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告147 道面遺跡・塚地古墳

種子島開発総合センター

種子島 縄文時代の夜明け

国立文化財研究所

国立文化財研究所30年記、国立文化財研究所

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財調査報告書第15集 長岡京跡右京第638次・神足遺跡発掘調査報告、同第16集 長岡京跡右京第641次・開田遺跡発掘調査報告

八幡市教育委員会

八幡市埋蔵文化財発掘調査概報 第25～27集

京都府立丹後郷土資料館

丹後発掘

京都市歴史資料館

年報No.17

三和町郷土資料館

大原の産屋

園部文化博物館

園部藩と城

向日市文化資料館

西国街道と向日町

城陽市歴史民俗資料館

花-古瓦と古代寺院

花園大学

花園大学研究者総覧1999

同志社大学歴史資料館

館報第2号、同志社大学歴史資料館調査報告第1冊 北小松遺跡、同第2冊 観音寺山遺跡発掘調査報告書

京都府埋蔵文化財研究会

第6回京都府埋蔵文化財研究集会 発表資料

口丹波史談会

口丹波史料6-5 盃魚庭落葉

白井忠雄

継体大王の時代

塚本敏夫

三次元形状計測による文化財のデータ保存システム構築と応用

松井忠春

朝鮮古代研究 第1号

水野和雄

福井考古学評論第11輯『越前敦賀の復権』執筆その後

森島康雄

出土銭貨 第11、12号、中近世土器の基礎研究

XIV、第18回 中世土器研究会報告資料

秋淵植

考古学の理論と方法論

李弘鍾

高麗大學校埋蔵文化研究所研究叢書第2輯 館山里遺蹟、同第6輯 寛倉里周溝墓

編集後記

ずいぶん寒い毎日が続きます。1月の様子からだとも今年も暖冬が予想されましたが、2月には例年通り冬将軍がやってきました。時節柄、お風邪などひかれませぬよう。

考古学を取り巻く状況は岐路に立ちいたっております。つまり、発掘調査の技術で遺跡を解明する発見の時代から、考古学の方法で歴史を明らかにする説明の時代へと。今、考古学に求められているのは混沌とした現代を解剖するための手段なのかもしれません。

(編集担当=河野一隆)

京都府埋蔵文化財情報 第75号

平成12年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax 075-922-1189(代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel (075)441-3155(代) Fax 075-417-2050(代)

『京都府埋蔵文化財情報』第75号正誤表

頁	場所	誤	正
P 13	23行目	永山県	永城県
P 13	第 9 函	永山県	永城県
P 57	左41行目	(文字化け)掘	発掘
P 57	左47行目	(文字化け)掘	発掘
P 57	右 4 行目	報告書N	報告書IV



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER